
煌く想いと 咲いて散る花と

霜月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌く想いと 咲いて散る花と

【Nコード】

N57720

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

幼なじみの井上煌と佐々木晶はある共通の秘密があった。

それは、『霊が見える』ということ。

その力を隠しつつ、霊を助ける手助けをしていく二人の、一年間の成長物語。

第一部：あらすじ

幼なじみの煌と晶はある日、親友から『幽霊屋敷』の噂を聞いた。さっそくその屋敷に行った二人を待ち受けていたのは

！？

傳き想いを 花に捧げる ー (前書き)

現代ファンタジーものです。

頑張って更新するので、飽きずに読んでくれるとうれしいです。

儂き想いを 花に捧げる 一

私は あなたを 愛しています

ずっと ずっと ずっと

あなたが 還ってくる時を ずっと 待っています

この 櫻の木の下で

季節は、四月。

暖かい日差しが降り注ぐ室内。その部屋のベッドに気持ちよさそうに眠る少年が一人いた。

部屋は綺麗、とは、まあ言えるであろう状態で、少年は心地よさそうに寝息を立てていた。

そこに、廊下から慌ただしい音が響く。瞬間、ばん、と音をたてて部屋の扉が開かれた。

中から入ってきたのは、少年と同じ年頃の少女だった。

漆黒の長い髪は左右で高いところで結んであり、肌は白い。瞳は大きく、一般的に間違いなく美人に入るであろう整った顔だちをしている。

しかし、今やその顔は怒りに染め上げられていた。

「煌っつ！起きろっつ！」

声は少女特有の高い声だ。

眠っていた少年はいつきに目が覚めたのか、飛び起きた。

「あ、晶……？」

煌は驚きを隠せない様子で、さかんに瞬きをした。それを晶は鋭い眼光で睨み、口を開く。

「さつさと支度しなさい。今何時だと思ってるの？」

びし、と机の上に置いてある時計を指さし、晶は言う。

対する煌は、自分の置かれていた状況が良く分からないのか、目を丸くしている。

煌は、濃い茶色の短い髪で、瞳も髪と同じ茶色をしている。顔は整っていて、どちらかというと、女のような顔立ちだ。本人はそれを気にしていたりする。

おそろおそろ、煌は時計を見た。

そこには、予想外の時刻が。

「あああああああつつつ！？」

絶叫。

晶は両手で両耳をおさえ、はあとため息をついた。

「私、外で待つてるから、さつさと来てよね」

そう言い残し、晶は部屋を出た。

煌は急いでベットから起きて、着替えを手にとった。

急いで階段を駆け下りて、母から朝ご飯を受け取り、外に出た煌を待っていたのは、少々不機嫌な顔をした晶だった。

「遅い」

いつもより低い声で、一言。

「ご、ごめんって……」

肩をすぼめ、煌は上目遣いで晶を見る。

遅い、と言っても、彼らは中学二年生だ。まだ中学生が学校に行く時刻には早い。

しかし、彼らには、早く行かなくてはならない、理由があった。煌と晶の家系には、ある共通の秘密があるのだ。

「遅くなって、ごめんね」

優しく微笑み、晶は電柱に花を添える。花は一輪で、綺麗なピンク色をしていた。

晶の隣で、煌は笑った。

「今日はピンクの花を持ってきたぜ」

そう行って、なにかに目線を合わせるようにかかむ。晶もだ。

他の人には、二人でしゃがんでいるようにしか見えないだろう。

だが、二人には、もう一人、この場所に子供がいるのだ。

足は透けていて、見えない。

少女は微笑んだ。

『いつもありがとう。お兄ちゃん、お姉ちゃん』

煌より薄い茶色の、肩にかかるくらいの短い髪をした、六、八歳くらいの少女。

淡い水色のワンピースを着て、嬉しそうに微笑んでいる様は、普通の子供に見えるだろう。

しかし、その淡い水色のワンピースには、赤黒いものがこびり付いていた。

「そんな、お礼言われるほどのことじゃないよ。むしろ、こんなことしかできない」

ごめんね、と晶は俯く。

すると、少女の手が、晶の肩に乗った。しかし、晶にはその感触がない。

『そんな！お姉ちゃんたちが、いつも来てくれて、わたし、本当に嬉しいよ。ありがとう』

少女は、また、微笑む。

しかし、その様は他の人には見えないのだ。

二人の家系は、『幽霊』が見える才を、産まれながらして持っている。

二人は、その力が特に強く、小さい頃から苦勞していた。

学校で、なにか見える、と言えば、嘘つき呼ばわりされたりした。それを親に言ったら、「他人にそういうことを言うな」と注意され、それからしばらく二人とも言わなくなった。

しかし、見えているものを放っておくことも出来ない性格の二人は、こうして朝早く起きて、花を添えていくのだ。

時たま、幽霊の話を聞いてやつたりして、成仏する手伝いもする。そんな生活を、二人は送ってきた。

なぜ二人かというと、親が知り合いだし、家が隣だったに他ならない。

親は、そんな二人を？笑ましく見守っている。

「さあーで、そろそろ学校行くかあ」

のびを一つして、煌は学校に行く道を歩く。

その後を晶は歩いていくが、少し早歩きだったので、すぐ隣になる。

「次の日は、なんの花にする？」

「そうねえ」

顎に手を当てて、晶は考える。

煌は、空を見上げて、同じように考える。

「あ」

ふいに、声をだした。

晶が煌を見る。

「なに？」

「さくら櫻、は？」

「櫻？」

怪訝そうに顔をしかめた晶だが、ああ、と頷いた。

「いいかもね！それ」

顔を輝かせて、微笑む晶に、煌は、おう、と頷いた。

「枝、おる？」

「あー……どうしようか」

顎に手をあてて、晶は空を見上げた。

儚き想いを 花に捧げる 一（後書き）

初めまして、霜月です。

初めて書いた小説なので、駄目駄目ですが、それでも読んでいただけると幸いです。

二（前書き）

第一部 儚き想いを 花に捧げる 二

この話は、恋愛話です。

「よ！おはよう！煌、佐々木！」

教室に入った二人を迎えたのは、漆黒の髪をした、同じ歳の男子だった。

裏表のない笑顔で迎えられた二人は、慣れた様子で自分の席に座る。

「おー。おはよー樹！」

気のない返事を返して、煌は教科書を机に押し込む。

晶は一樹を見て、ふうとため息をはいた。

「で？あんたがこんな爽やかな笑顔を向けるって事は……宿題、忘れたの？」

「あつたりー。さすが佐々木！」

満面の笑みで両手を差し出す一樹に、晶はまたため息をはいた。

「はいはい。間違えてても知らないわよ」

「何いつてんのー？五教科全部5の人が！」

そう言つて、いそいそと晶のノートを受け取り、写し始める一樹に諦め半分、呆れ半分の視線を送り、煌は晶に言った。

「お前もお前で、律儀なもんだなー。忘れる度に映させてやって」

「別に？私に害はないし。ただ端にあいつの頭がどんどん悪くなるだけよ？」

そう言い、いきゆく男女構わず振り向きそうな満面の笑顔を顔に浮かべる晶。

そんな晶の隣に顔を引きつらせる煌。

この二人は、学校でも結構有名だ。

二人とも容貌がいいし、晶は頭が良い。煌は運動が出来る。

しかし、二人共部活動に入っていなかった。ただ単に、その時間を幽霊に当てただけだが。

二人の親は、普通に仕事をしてる。が、時たま、ふらと幽霊退治に出かける時がある。

そういう様子を見てきた二人は、いずれ自分もあなりたい、と思っていた。

あ、櫻……

ふと、煌は窓を見た。

風に揺られて、舞う櫻の淡い色をした花弁かべんが、窓から入ってきた。

「幽霊屋敷？」

昼休み。

煌と晶と一樹と、一樹の彼女であり、晶の親友、美沙みさは、一緒に昼食を食べていた。

この中学校は弁当制で、各自、自由に食べられる。

「そー。もう、このクラスで知らないの、あんたら二人だけだと思うけど」

そう言っつて、人なつっこそうに笑うのは美沙。

「この学校から真っ直ぐ直進に進むとさ、でっけー櫻の木があるだろ？」

その言葉から、幽霊屋敷の説明は始まった。

その櫻の木の右側から、一直進に道がある。

その道突き進むと、ある屋敷に行き着く。

その屋敷が、『幽霊屋敷』なのだそう。

その屋敷の近くには、女の霊がいるのだという。

長い、腰まで届く漆黒の髪は前にたれ、顔は見えない。
ただ、低い声で、なにかをずっと呟いているそうだ。
そして、屋敷に近づいた人間に襲いかかる。

「6組の奴が、本当に襲われたんだとさー」
楽しげに笑って、一樹は明るい声で話す。
その内容は、衝撃的なものだったが。

煌と晶は顔を見合わせ、頷きあった。

なんで？

なんで？

なんで あなたは

還ってきてくれないの？

私は、ずっと ずっと 待っているのに

返して 帰して 還して

あの人を

還して

二（後書き）

第二話更新です。

第三話は、また明日、更新したいです。

それ以降は・・・もしかしたら、来週の土曜か金曜になる可能性があります。

話が落ち着いてきたら、毎週土曜に更新したいです。

三（前書き）

更新、できましたー

三

「ここ、かあ……………」

煌と晶は、いかにもなにか出そうな雰囲気かもを醸し出している、薄暗い屋敷の前に立っていた。

「絶対、出るな」

苦笑して、煌と晶はその屋敷に足を踏み入れた。

学校が終わりしだい、煌と晶は、あの屋敷に向かった。学校からまっすぐに進み、だいぶ歩いたら、大きい櫻の木が見える。

思わず、息をはいた。

その櫻の木は、今まで見たどんな櫻の木よりも、美しかったのだ。長く伸びる枝に咲き誇る花は、美しく舞っている。

「綺麗……」

呟かれた晶の言葉は、風に紛れて消えた。

屋敷は、もう大分腐っていた。煌が扉を開けようとすると扉は、鈍い音をたてて開いた。

煌は顔を思わず顰めた。

屋敷の中は、もう何十年も使われていないようだった。外見でわかることだが。

隣の晶の、息を呑む気配が伝わる。

背中に、氷を滑らせたような悪寒おかんがした。

なにか、いる

ごくりと唾を飲み込み、煌は屋敷に一步踏み入れた。

「ここからは、二人別々で行動しましょう」

階段を前に、晶がそんなことを言った。

それに、煌も頷く。

「そうだな。この屋敷、無駄に広いし」

ぐるりと屋敷を見渡し、同意を返す煌に、晶は深く頷く。

そうして、二人は別々で幽霊探しをすることになったのだ。

櫻の花弁が、舞っている。

女はそこで、ある人をずっと待っていた。

彼は、医者の子だった。しかし、本人は次男で、跡取りではなかった。それに、彼は医者としての技術がまっただけだったのだ。

それなのに、彼と逢うことができたのは、父のおかげだった。

同い年の、男がいる、と聞いた。

病弱な自分の、良い話相手になると思っていたの行動だったのだろう。

彼は、心根のとても優しい、誠実な人だった。

幸せだった。

『赤紙が、届いたんだ』

その言葉を、聞くまでは。

『日本帝国のために、戦えることを、誇りに思うよ』

そう言っ、憂い気に微笑む彼に、なにも言えなかった。

『ねえ、香子……』

真っ直ぐ、こっちを見て、彼は。

『僕が、還ってくるのを、待っていてくれるかい？』

ええ、まっているわ。

ずっとずっと

だから、還ってきて。

この、櫻の木の下で、待っているから。

ずっと　ずっと

三（後書き）

四、は・・・更新・・・できる・・・かなあ・・・？

四

「おわっ！？」

素っ頓狂な声を上げて、煌は慌てて数歩後に下がった。さっきまで煌が立っていた箇所には、無惨な穴がある。

「……………」

しばし無言でその穴を見ていた煌は、気を取り直して、辺りを見回した。

この屋敷は、見た目以上に脆いらしい。それは先ほどまで歩いていてわかった。

しかし、脆すぎではないだろうか。眉を寄せて、煌は、また、歩き出した。

対する晶は。

こつちもまた、穴に苦戦させられていた。

なにせ、脆い。予想以上に脆いのだ。一步踏み出した所で、いたい今まで何回穴があいただろうか。

「ただ脆いのよ……………」

思わず舌打ちしたくなる衝動をこらえ、晶は床を睨む。

その時、首筋から全身に、悪寒が駆けめぐった。

「なっ……………」

後を振り返る。しかし、そこは闇が広がっているだけ。

そこで初めて気づいた。今は夕方だ。しかも、もう四月。夕方までここまで暗いのは、明らかにおかしい。

やばい
！

「……………煌……………」

咄嗟に脳裏に浮かんだ少年の名を、晶は掠れた声で呼んだ。

悲鳴が、聞こえた気がした。

「晶……？」

煌は顔を上げて、耳をすませた。
突如、破壊音が耳朶をうつ。

「……！？」

反射的に、煌は音のするほうへ駆けだした。

「晶！」

部屋の扉を開け、煌は叫びにも似た声で、幼なじみの名を呼んだ。

「……」

晶は、壁に打ち付けられていた。遠目から見分けるほど、顔が青い。

煌は、息を呑んだ。

部屋の真ん中に、女が起立していたのだ。

純白のワンピースを着ており、髪は腰まで届くほどの漆黒。顔は髪で隠れていて、見えない。

身体から発せられる靈気は、いままでのものとは桁違いのものだ。
つた。

「……………」

女がなにか呟いた。

煌は、よく聞こえず、たじろく。

「お前、は……」

「待っていたのに……」

ようやく、女の言葉が聞き取れた。

煌は晶を助け起こし、部屋の外に移動させた後、女と対峙する。

睨むように女を見据えた。

「なんで、こんなことするんだ？」

煌の声が、部屋に凜と響く。

「私、は……待っていたのに」

か細い声が、聞こえた。

「なのに……なんで……」

女の声は、今にも泣き出しそうに細く、悲しみをおびていた。

「なんでなんでなんでなんで……」

女は漆黒の髪を振り乱し、叫ぶ。

「なんで……」

次の瞬間、女の周りから、激しい風が吹き荒れた。

「……」

煌はそれがもろに辺り、壁に打ち付けられる。

「……あつ……」

頭を打ち付けたのか、一瞬目眩が煌を遅う。

「く……そ……」

四（後書き）

とりあえず、短いけど更新できました！。
ふう。

第一部、こんなにながかったっけ・・・？と思いながらかいていました。

五

頭が痛い。

「……うん」

「**瞼**が重いが、それでも今、ここで氣を失うわけにはいかない、と頭を振った。」

扉の向こうには、晶がいるのだ。

でて…て

掠れた女の声が聞こえる。

「あなたは、あのんじゃない……でてって……でてって！」

最後の声は、酷く低い声だった。嫌悪するような声音だ。

煌は、まだ意識が朦朧とするなか、扉をあけて、座り込んだ。

そこは、すでに外だった。

屋敷の近くの木に、晶が寄りかかっていて、気を失っている。

煌は、晶の側まで歩いた。

そこで初めて、自分が血を流していることに気づく。

「あー……」

頭からの出血に、さして驚いた様子を見せず、煌は晶を抱き上げた。

「馬鹿息子がああああ！」

家に帰って早々、実母に怒鳴られる息子。

煌は、耳を押さえて、鬱陶うつとしそくに母を見上げた。

「うるせーなー母さん。晶がおきるだろーが」

「馬鹿だ馬鹿だと思ってたけどここまで馬鹿だとは思わなかったわよ馬鹿！」

「うっせーっの！本当に馬鹿になったらどうしてくれる！」

煌は、ぶつけた頭を容赦なく叩いてくる母の手を押しやり、怒鳴る。

煌の母、晃はため息をわざとらしく吐いた。

「もー。あんたねえ……！直弥さんになんて言えはいいのよ……」

「大丈夫だろ、おじさん、確か晶が熱だしてもそれからかって遊んでたし」

直弥さん、とは晶の父だ。

晃と晶の母、梨花は親友で、煌の父、宏樹と直弥も親友だったらしい。

幽霊が見える能力は、煌も晶も母から受け継いだ。どちらの母親も、そういう家系で、二人とも父親もそれを承知で結婚したらしい。

「あんた、本当に馬鹿ねえ！父親ってもんは娘が可愛いもんなのよ！その娘が気絶して帰ってきたとしたら……」

「黙ってればいいーじゃんか」

そう言っつて、煌はちらりと晶を見る。

眉を寄せて、唸っていた。

煌の容貌は晃譲りだ。晃と煌が並んだら、もしかしたら母子というより姉弟に見えるかもしれない。

しかし、晃の髪は漆黒だ。煌の髪は、父の宏樹似だった。

「あんた、そーいう所、ほんとに宏樹にそっくりね」

「父さんいたらまっさきに反論すると思うぜー？」

はあと頬に手をあてて嘆くように言う母に、煌は冷やかすように言葉を続けた。

「ん……」

煌と晃が、意味のない舌戦ぜっせんを繰り広げていたら、晶の瞼がゆつくりと開かれた。

さすがのうるささに目を覚ましたのだろう。

煌と晃が同時に晶を見る。

「晶ちゃん！大丈夫だった？ごめんね、この馬鹿のせいで！」

「え……？おばさん？」

目が覚めた早々、いきなり幼なじみの母に謝られ、なにがなんだが分からない様子の晶は、状況確認のため、煌を探した。

「あ、煌……」

ほ、としたように名前を呼ばれて、煌は首を傾げる。

「あ？」

なんだ？と思いながら晶と目線を合わせるように座る。

「この状況、なに？」

「あ……」

顔をひきつらせて、煌は晃をちらりと見た。

「なるほど。で、あんたは私を抱えてここまできた、と」

「おう」

話を一通り聞いて、晶は頷く。

煌はぶつけた頭を搔いた。

「まあ、母さんが言うには、お前も俺も怪我そこまで酷くないらしいし、大丈夫だろ。……明日もいくか？」

確認する煌に、晶は力強く頷いた。

「ええ。もちろん」

「よし！」

晶は明日の事について少し話した後、家に帰った。帰ったといっても、煌と晶の家はすぐ隣同士だ。

夕飯の準備が出来たらしく、母が自分を呼ぶ声がある。

それに返事をし、煌は階段を駆け下りた。

米を頬張りながら、煌は自分のぶんのご飯をよそっている晃に屋敷のことを聞いた。

「なあ、母さん、あの俺たちの学校からまっすぐいって、櫻の木のとこで右曲がっていける屋敷のことしってる？」

一応、母なら知ってるか、と思って聞いてみた問に、晃はああ、と呟いた。

「知ってるわよ。たしか……あーそう、磯部川、いそべがわていう名字の……お金持ちが住んでた屋敷でしょ？」

五（後書き）

．．．．．第一部が長くなっている！

もうちょっと考えて話を作りたいです。

あー．．．。

六

「よし、行くか」

「うん」

放課後。授業終了のチャイムが鳴り響く中、席が隣同士の煌と晶は同時に鞆を肩に担いだ。

この二人、小学校から中学校まで、同じクラスに、席が隣同士だった。これぞ腐れ縁というやつではないのだろうか。

腐れ縁すぎるだろ、と思わないでもないが。

「へー。じゃ、あの屋敷って、その磯部川って人が住んでたんだ」

晶は言葉とは裏腹にさして驚いた様子も見せずに口を開く。

「おう。母さんが言うから、間違いない。……と思う」

最後に付け加えられた言葉に、晶は小さく吹き出した。

結局、晃が知っていたことは、その屋敷に『磯部川』という人間が住んでいたことくらいで、他のことは知らなかった。

しかし、煌と晶にとっては思ってもない収穫しゆつかくだった。

「あれ？」

煌より先に進んでいた晶は、ふいに声を上げた。

晶の視線をたどって、煌も驚きを隠せない様子で目を見張る。

相変わらず、櫻の花弁が風に舞っている。が、それだけではない。

櫻の木の下に、人がいたのだ。

見るからに、80代後半くらいの見た目をした、老婆おきなだった。

その瞳は、どこか憂いを帯びていて、櫻の木の幹にしわの刻まれた手を添えている。

「あの……」

晶が、おそろおそろ話しかけると、相手はよつやくこちらに気づいたのか、視線があつた。

「あなたは……？」

すると、老婆はにこりと品の良い笑みを浮かべ、ゆっくりと二人に近づいてきた。

「あなたたちも、あの屋敷にいくのかい？」

すこし悲しげに、老婆は言う。

晶は遠慮がちに頷いた。

「はい。……あの、少し、いいですか？」

「なんだい？」

老婆の声は、優しかった。

しかし、先ほどの言葉から推測するに、この人はあの噂すいそくをしっている。

『幽霊屋敷』

この屋敷の関係者なら、良い気分はしないだろう。

「あの屋敷で……若い、黒の長い髪の女の人が、死んだとかは……」

……？

「ええ。ありましたよ」

老婆は、少し憂いを帯びた顔で微笑する。

晶は、この人は若い時、美人だったろうな、とふと思った。今でも十分、品の良さが伝わる。若い時はこれ以上だろう。

「私はね、あの屋敷に住んでいた者なんですよ」

「えっ!？」

さすがにこれには、煌も晶も驚いた。

「今では、幽霊屋敷、なんて言われてますけど、昔は綺麗でしたよ？」

おかしそくに微笑む老婆に、晶は言葉を失う。

「……幽霊、とは。たぶん、姉のことだと思います」

優しい、声が。

「姉は 香子姉さんは、身体が病弱でね。よく、父の友人の医者のお世話になってました」

その医者には、二人息子がいたのだろうだ。そのうちの、下の息子が、姉と同年だった。

良い話相手になるだろう、と父は友人に頼み、そこで香子と、息子 彰人^{あきひと}は出逢った。

そこから二人は仲良くなり、ついには恋人同士にまでなった。もちろん、両方の親からの反対はあった。

だが、真剣な二人に、両方おれた。二人は幸せになるはずだった。なのに。

「彰人さんに、赤紙が届いてしまった……」
老婆にとつて彰人は、優しい兄という印象があった。

姉とは10以上歳が離れていて、ずいぶん可愛がってもらった。

彰人も同じで、老婆はこの二人が大好きだった。

「姉さんと、彰人さんは、ある一つの約束をしたんです」

「絶対帰ってくるから、あの櫻の木の下でまっついていてくれ」

姉は、『まっっている』と答えた。

その後、姉はずっと櫻の木の下にいた。

それから何ヶ月もたった後、一通の手紙が届いた。

それは、彰人の死を知らせるものだった。

姉はずっとそれから寝込み、結局病にかかって、儚くなったのだという。

「姉さんは、きっと、今も、彰人さんを待っているのでしょうねえ……」

悲しげに、愛おしげに、老婆は櫻の木の幹を撫でる。

それをただ、見てるだけしかできなかった煌は、唇を噛みしめた。
「なぜ、あなたは俺たちに教えてくれたのですか？」

いつもより数倍丁寧な口調で、煌は訪ねた。

老婆は少女のように首を傾げ、また、優しく微笑んだ。

「あなたたちなら、姉を救ってくれると思って……」

おかしいかしら？と言う老婆に、煌も晶も言葉を失う。

それでも、いち早く立ち直った晶は、最後に一つだけ訪ねた。

「彰人さんの

」

七

煌と晶は、墓場にいた。

普段、あまり行かない墓場を黙々^{もくもく}と歩いていく。

晶の手には、一枚の紙切れが握られていた。ふと、二人が足を止める。

そこには、一つの、大分古い墓が、あった。

しかし、丁寧に手入れがされているのか、綺麗な墓の隣には、一人の青年がいる

嫌、普通の人間には、見えないだろう。

「彰人さん、ですね？」

晶がゆっくりと口を開いた。

紡がれた言葉は、風に溶けて消えていく。

「君たちは？」

男性特有の低い声が耳朵をうった。普通の人間には、これが聞こえないのだ。

「あなたは、なぜ、ここに？」

今度は、煌が口を開いた。

男はどこか遠い所を懐かしむように、微笑んだ。

「約束を、したんだ。……でも、死んでしまった」

彼女は、待っていてくれるだろうか。

嫌、もうとつくに思い残すことなく天に逝^いってしまったのだろうか。

「叶うのならば……」

もう一度、逢いたい。

逢って、ただいま、と言いたい。

「逢えますよ」

少女の声が、響いた。

「あの人も 香子さんも、あなたを待っています」
強い視線をうけ、彰人は言葉を失う。

「ずっと、待っています」

すると、彰人は目を見開いた。混じりつけのない瞳から、涙が伝い落ちる。

そして、泣き笑いのような顔で、頷いた。

『香子……！』

逢いたい。逢いたい。

そう、ずっと想っていた。

逢いたい、と

煌と晶はまた、あの屋敷に足を踏み入れた。今度は、後に彰人も連れて、だ。

すると、一段と濃い靈気が、煌たちの頬をかすめた。

扉を開けると、部屋の丁度中央あたりに、香子が起立している。

『また……あなたたち？』

厳かな声おごそが聞こえた。

『出て行って！』

「香子さん」

煌の言葉に、香子は明らかに驚いた気配が晶には伝わった。

『なんで　私の、名を……』

掠れた声かすが、耳朵をうった。屋敷全体の空気が震えるようだ。

「彰さんを、連れてきたんだ」

煌の言葉に、香子は息を呑んだ。すばやく晶と煌はその場をどく。すると、そこには彰人がいた。

香子を見て、あの時と同じように微笑んでいる。

『香子……』

声、が。

あの時となにも変わらない、忘れるはずのない、声が。

『彰、人さん……？』

香子の姿が、まだ20代前半の女性へと変わった。
大きい瞳から、涙が伝い落ちる。

『彰人さん……！』

『待っていて、くれるかい？』

そう聞いてきた彼に、迷わず頷いた自分。
まっっているから、帰ってきて。

それからずっとずっと、待っていた。

ずっと。ずっと。ずっと。

失いたくなかった。

この、人を

この、温もりを

ずっとずっと、側にいたかった。

『ようやく、逢えた……っ』

彰人はようやく、逢いたいと願った人を、抱きしめた。

七（後書き）

次回、第一部最終回！

案外、今日じゅうに終わるかも・・・。

八（前書き）

第一部最終回です。

八

『彰人さん……』

彰人は、香子を強く抱きしめた。香子はすがりつくように、その背中に手を伸ばす。

おえっ 嗚咽の合間に名前を呼ぶ。涙で、視界がぼやけた。

ずっとずっと、逢いたかった。

『待っていてくれて、ありがとう』

懐かしい、愛おしい声が、香子の耳朵をうつ。涙で顔をくしゃくしゃにして、香子は横に顔をふった。

『逢いたかった……逢いたかった……』

もう離れないよう、強く服を掴む。この温もりが、忘れられなかった。失ったなんて、信じたくなかったのだ。

『彰人さん……』

『……ん……？』

抱きしめていた背中を軽くたたいて、香子は彰人を見上げる。

彰人は首を傾げて、香子の視線に合わせるように少しかがんだ。すると、香子は、花が咲き誇るように微笑んだ。

『おかえりなさい』

きょ 虚をつかれたような顔をして、彰人は目を丸くした。

しかし、次の瞬間、香子と同じように微笑んだ。

『ただいま』

逢いたかった

待っていた

あなたを

あなただけを

この、咲き誇る櫻の木の下で

抱き合う二人の身体から、光があふれた。

「成仏する……」

晶は手をかざし、呟く。あまりの眩しさに目を細めた。すると、香子が彰人になにか耳打ちしていることに気づいた。なにを話しているのだろう、と思っていると、気づいたら、香子がすぐ目の前にいた。

といっても、成仏する直前なので、半透明だが。

そして微笑むと、晶の耳に口を近づけ、小さく小さく、耳打ちした。その瞬間、晶が真っ赤になる。

その様子に、煌が目を見開いた。

「お、おい、どうした！大丈夫か！？」

「ななななな、なんでもないっ！」

晶は真っ赤になって首を降る。

そんな二人の間に、一枚の櫻の花弁が舞い降りた。

「あ」

煌がその花弁を拾い上げ、微笑んだ。晶は空を見上げ、同じく微笑んだ。

そこには、櫻が満開に咲き誇っていた。

「なー、晶」

「なによ？」

屋敷から家に帰る途中、煌は晶を妙に真剣な顔をして見た。

「お前、香子さんになにいわれたんだよ？」

「あ」

思い出したのか、晶の頬がまた赤くなる。

「な、なんでもないから！」

そう言つて、晶は走っていく。

「なんなんだ？」

首を傾げて、煌は後を追った。

『煌くんと幸せに』

それが、香子が晶に残していった言葉。

愛しい、愛しい、この人の手を

もう、二度と、離さない

。

満開の櫻が、その想いに答えるように咲き誇った。

第一部 儚き想いを 花に捧げる 完

八（後書き）

ここまでお読み下さった方、ありがとうございます！

次の部の予告をします！

第二部 久遠の刻を 舞い踊る

です！

久遠の刻を 舞い踊る ー（前書き）

第二部、開幕！

友情メインです。

久遠の刻を 舞い踊る 一

一緒に、頑張ろうね

そう言って、ブレスレットをつけて笑って。

うん！

無邪気に笑って、でも、本気で交わした約束を。

嘘だ！なんで……美咲！

消えない。

消えない。

あの子の声が。笑顔が。

六月。梅雨がきて、毎日のように雨が降っている。

教室の窓から、煌^{こう}は雨を見ていた。絶え間なく降り続く雨に、いい加減嫌^{いやけ}気がさす。

早く、梅雨が終わればいいのに……

ふう、とため息を吐いて、煌は、黒板を見た。いつのまにか授業がだいぶ進んでいることに気づき、慌ててノートを書く。

それを隣で見ていた晶^{あき}は、呆れたような視線を、煌に送った。

「あー！ようやく終わった！」

授業が終了して早々、煌は机に突っ伏した。対する晶は次の授業の準備をいそいそとしていた。

「あんた、窓ばかり見てないで、ちゃんと授業聞きなさい。テストで酷いことになるわよ？」

「わかってるけどよー……」

情けない声を上げて、煌はまた窓に視線を移す。雨のせいで、よく外が見えない。

教室には、雨の日に特有の臭いがたちこめており、それが煌の雨嫌いに拍車はくしゃをかけていた。

眉を寄せて、煌は晶を見た。

春は好きだし、夏も好きだ。秋も、冬は寒いが、好きだ。しかし、どうもこの夏の移り変わりにくる梅雨あじさいは好きになれない。

雨に打たれて綺麗に見える紫陽花あじさいは好きだが、雨は嫌いだ。じめじめするし、なにより、あのどんよりとした暗い感じが苦手だ。

「ほら、唸うなりってないで、さっさと授業準備しなさいよ」

晶が煌の額を軽くたたき、口を開く。煌は渋々しぶしぶといった体ていで授業準備に取りかかった。

次は理科だ。理科は移動教室なので、なるべく早く行かなければならない。

「理科の教師、苦手なんだよなあ……」

苦虫を数匹噛みつぶしたような顔をして、煌は呟く。晶も同じような顔をして、ああ、と呻いた。

「私も……」

なにせ、理科の先生は、妙に熱血なのだ。

顔を合わせれば部活にはいれと迫^{せま}ってくる教師の顔を思い出す。正直、迷惑きわまりない。

教科書を持って煌と晶は教室を出た。理科室は一階のため、階段を下りる。

その時第一理科室の前で、一年の集団が見えた。二年は第二理科室を使っているので、その横を通りすぎようとした煌の目に、あるものがとまった。

「……っ」

息を呑む。

それは、集団より少し離れた所で、友人と話している女子生徒。その生徒の足には、どす黒い、縄のようなものが巻き付いていた。それは、普通の人間には、見えない。怨念^{おんねん}。

「なんで……？」

晶も気づいたのか、その一年の足を見て、顔をしかめていた。

それは間違いなく、『呪い』と言われているものだったのだ。

久遠の刻を 舞い踊る ―（後書き）

第二部です！。

しょっぱなから、なんじゃこりゃ、みたいな内容ですね・・・。

あの子とは、小学四年の時に同じクラスになった。

茶色の、すこし癖のある髪は肩より少し長く、大きい瞳は、髪と同じ色彩を宿していた。

わたし、美咲っていうの。よろしくね！

席が隣同士になって、そこからよく遊ぶようになった女の子。

わたしは、由里。よろしくね。美咲ちゃん

彼女という時、すごく楽しかった。いつも笑っていた。幸せだった。

クラスで、ダンスを一番初めに習い始めたのは、美咲だった。踊っている時の美咲は、なんだかすごく輝いて見えて、自分もやってみたいと母に頼み込んだ。

由里もダンスやるの！？だったら、わたしが通っている教室にいこう！

それから、ずっと二人でダンスに没頭した。楽しかった。初めはなかなかできなかったけど、だんだん出来るようになっていった。それが楽しくて、二人一緒に、ずっとやっていくと思っていた。ある日、二人でおそろいのブレスレットを買った。日光を反射して輝くブレスレットは、宝石のようだった。

一緒に、頑張ろうね

美咲は、ダンスの才があった。自分より遠い所に見えた。でも、それを疎むなんてこと、思わなかった。美咲の踊っている姿は、本当に綺麗だったから。

それは、もうちょっと足あげたほうが、綺麗に見えるよいつも、的確なアドバイスをしてくれて。いつも微笑んで、優しくて。

おそろいのブレスレットは、自分たちにとっての絆のようなものだった。

ずっと、一緒に踊ろう。二人で笑って、でも、真剣で。

その約束は、永遠のものだったのに。

由里！美咲ちゃんが……！

その言葉はまるで、悪魔のようだ。

美咲！なんで……っ

約束、したでしょう？

なんで…

『ずっと、一緒に』

この言葉は、もう、あんなに遠い。

「とりあえず、教室にいこうぜ。晶」

煌は、固まっている晶の肩をぽん、とたたき促した。晶はそれでようやく気がついたようで、第二理科室の扉を開ける。

中にはもう、だいたいの生徒がはいって、馬鹿騒ぎをしていた。煌は、その騒ぎに混じっている一樹の頭を煌がたく。

「おわっ！？…ん、なんだ煌か。どーした？」

いきなりたたかれて、一樹は驚いたように目を丸くした。

「あのさ、一年のー…誰だっけ？」

「上阪さん、よ」

「ああ、そうだった」

ネームを見たのに忘れた煌は、後にいた晶に尋ねる。晶は、はあ、
とため息を一つ吐いて、口を開いた。

「上阪って……あの上阪由里か!？」

「そうだ」

下の名前を知らないはずなのに、煌は即答する。晶は呆れた目で
煌を見た。

「有名なのかよ？」

「有名なものにも！ダンスでめっちゃくちや賞もらってるぜ。その子
人差し指を煌に向けて、一樹は我がことのように自慢げにいう。

「一回俺も、ダンス見たことあったけど、すごかったぜ!」

頬を紅潮うしろあかさせて、一樹は熱く語り出す。それを聞き流しながら、
煌と晶は同じことを思っていた。

美沙みさにしれたら、こいつ殺されるな……

幸い、美沙は今、用事があつて、理科室にまだ来ていない。

一樹と美沙は一年の時から付き合っていて、周りからみても、お
似合いのカップルだ。そして、そのお似合いカップルの間にいるこ
の二人も密かに噂ひそされているということは、本人たち以外の二年が
知っていることだったりする。

「そうなのか……」

適当に相づちをうちながら、煌は、違うことを考えていた。

あの呪いは、周囲からの嫉妬か？

呪いは結構進行している。もうすぐで、彼女は歩けなくなるだろ
う。早く呪いを解かなければ、最悪の場合もありえる。

「てゆーかさ、煌。あの子、俺たちと同じ小学校だぞ?」

「え……?」

「そうだって!」

ほん、と両手をたたいて、一樹を煌と晶を指さす。

「確か、その時は有名じゃなかったな。小6からだ。有名になった
の」

俺たちが卒業した後じゃねーか……

ため息を吐き、煌は天井を見上げた。

「逆に有名だったのは、一和いちかず美咲みさきってほうだなー・・・」

「…一和、美咲……？」

怪訝な声を上げたのは、晶だった。一樹は顎に手をそえ、考え込む。

「ああ。たしか、上阪の友達だったはずだ…。そいつ、小5の時……」

思い出したのか、一樹の顔はこつばっていた。いささか、顔が青い。

「交通事故で……」

その先の言葉は、安易に想像ができた。煌と晶はお互い顔を見合わせる。

「あれは…その子のか……」

ぎり、と歯がみして、煌は呻いた。

許さない。許さない。

一緒って、いったのに……！

許さない許さない……っ！

『許さないわ。ねえ、由里』

』

二（後書き）

二、更新です！。予想以上に長くなった！
第一部より短くしたいです・・・。

昼休み。

由里は図書室に来ていた。図書室はいつも静かで、落ち着くからだ。この学校の図書室は、人があまり来ない。だから、いつも静かだ。特にこの季節は梅雨の湿気のせいでみんな、図書室に行く気が起きないらしい。

「ふう」

一番奥の席に腰掛け、机に突っ伏すような体制になる。昨日、ダンスの練習のしすぎか、足が少々痛い。

眉を寄せ、足の痛みを耐える。目をつむって眠ってしまおうか、と思った。

しかし、目をつむれば浮かんでくるのは、今はもう、いない友達の顔と声だった。

ずっと、一緒に……

無意識に、手を握りしめた。

このごろ、よく思い出す。夢にでも出るし、こういう時にも、思い出す。

「美咲……」

美しく、踊っていた。いつも微笑んでいて、優しくて、綺麗で。

由里にとつての憧れだった。

誓いのブレスレットは、今、机の上に飾られてある。あれが、美咲の形見のようなものだからだ。

由里の誕生日に、美咲が買ってくれた、誓いのブレスレット。

美咲が水色で、由里が桃色をしたブレスレットだった。

練習する時も、本番の時も、必ず、そのブレスレットを着けていた。今でも練習と本番の時、つけている。なんだか、力をもらえるような気がするのだ。

そんなことをつらつらと考えていたら、扉が開く音がした。顔を

上げると、直接話したことはないが、遠くから何度か見たことのある、有名な先輩が入ってきた。

「あ…」

「お」

二人同時に声をあげた。

入ってきたのは、煌だった。

「井上煌先輩？」

「上阪由里？」

また、二人同時に、お互いの名前を言う。

煌は首を傾げて、由里を見た。

「俺のこと、知ってんのか？」

「あ、はい。小学校の時も、中学でも、井上先輩と、佐々木先輩、有名だから…」

「晶もか！」

驚きに目を見開く煌に、律儀りちぎに答える由里。そんな二人の間に、声が入った。

「煌！なにしてんの」

声の本人は、晶だった。図書室の扉から顔を出し、煌を睨む。が、その言葉は最後まで紡がれることはなかった。

「上阪由里さん…？」

「なんで二人共私のこと知ってんですか」

由里は相手が先輩だと忘れて、つつこんだ。

煌は、授業で使う本を借りてくるのを忘れたことに、その授業前に気づいた。

慌てて晶と一緒に図書室に行ってみたら、予想外の人物が図書室

に居るではないか。

「嫌、そりゃ、お前が有名だからだよ」

由里のつつこみに、冷静に答える煌。晶は隣で苦笑していた。

「ちよっと、話たいことがあるんだけど」

晶が、遠慮がちに言う。それに、由里は怪訝そうに眉を寄せた。

それもそうだろう。話したこともろくにない先輩が、自分に話があると言っただ。

「足、この頃、痛いとか…ない？」

その問いかけに、由里の顔は、目に見えて蒼くなった。

許さない。赦さない。許さない。
許さない。赦ゆるさない。許さない。

私は、大きくなることなんてない。

身長も、これで伸びないし、学力も五年生のまま。

なのに、なんで？なんで、由里は、私より大きくなるの？

私より、頭が良くなるの？

私のいったことのないような、舞台の上で踊れるの？

赦さない赦さない許さない赦さない赦さない！

四

「その足の痛みは、もしかしたら、一和美咲が関係あるかもしれない」

煌の、淡々とした声が、図書室に響いた。

「なんで…美咲のことを…」

由里の顔は、青さを通り越して、蒼白そうはくになる。煌は、一言一言かみ砕くくだようにはきはきとした口調で続けた。

「信じれないかもしれないけど、俺たちは…」

「待つて」

煌の言葉は、晶の声に阻はばまれた。問うような視線を煌から受けた晶は、口を開いた。

「私たちの用事をかたづけしてから、話しましょう。第一、もう時間がないわ」

ちらりと時計を見て、晶は言った。そう言われて初めて、煌も時計を見た。もうすぐで、休み時間が終わる。

「今日、放課後、空いてる？」

「あ…ダンスの練習が…」

「何時に終わる？」

まるで、警官のようだな、と煌は思った。

「練習は、いつも、七時に。でも、いつも残ってるから…」

「残らずに、学校前の喫茶店きっさてんに来て」

有無を言わさない迫力を響きを持った晶の言葉に、由里はひとつ頷いた。

七時半。約束通り、由里は喫茶店に来た。

喫茶店には、ゆったりとした、落ち着いた音楽が流れており、中は人が少なかった。店内に目を走らせて、目立つ二人組を見つける。

「井上先輩、佐々木先輩」

名前を呼んで、二人の座っている席に近づいた。

二人共紅茶を飲んでくつろいでおり、晶なんかは参考書を読んでいる。

「ああ、やっと来たか」

煌が由里に気づき、片手を力なくあげる。相当暇そつとひまだったらしい。

「やっと、て…いつからここに？」

「学校おわってから、ずっと」

「早っっ！？」

学校が終わったのは、四時半ぐらいだろう。しかもこの二人は確か、部活動に入っていない。

「学校終わって早々、中学生が制服で喫茶店にいたら、学校に連絡が」

「ああ、そこらへんは大丈夫ー」

煌は笑って、晶を指さした。

「この店、こいつの父さんが経営してんだ」

その言葉に、晶は軽く頷いて、微笑んだ。

「だから、大丈夫よ。父さんには言っておいたわ」

爽やかに微笑んで、ありえないことを言う二人。

由里は、目眩でよろめいた。

「話の続きだけど…」

晶はちらりと周りを見て、声を潜ひそめた。

「私と、煌の母親 ていうか母の家系はね…」

その後が続いた言葉に、由里は目をむいた。

「えっ！？そんな…」

「嘘じゃねえよ」

煌のぶつきらばうな声が、よりいっそう由里を狼狽ろうたいさせる。

「確かに俺と晶 母さんたちも見える」

「そんな…じゃあ、先輩たちは…」

由里は顔を蒼くして、口を両手で押さえる。

「でも…なんで、私の足が痛いってわかったんですか？」

「それは…」

煌は、気まずそうに晶を見た。晶も顔をしかめている。居心地の悪さを感じて、由里は俯うつむいた。

「落ち着いて、聞いてね？」

晶の確認するような硬い声を聞いて、由里は少し泣きそうになった。目頭めがしらが熱い。

「あなたの、足には 『呪い』 が、かけられているの」

言っている晶は、つらそうだった。煌もまた、今までの表情が嘘かのように、眉間にしわを寄せている。

由里は、唇を強く噛みしめた。そうでもしないと、不安があふれてきて、泣くと思ったからだ。

「その、呪いは…」

一言、一言噛みしめて、由里は、泣きそうになるのをこらえて、煌と晶を見た。

「治せますか？」

駄目だった。

いつのまにか由里の目からは、とどめなく涙があふれていた。涙が、頬を伝って落ちて、服に染みこむ。

煌と晶は、真剣な顔をして、頷いた。

晶の細い、白い手が、由里の手を包み込む。

「治します。なにがなんでも。絶対に」

震える手を握りしめて、晶は、力強く言う。その声は、由里の耳に響いた。

「そういえば、なんで先輩美咲の名前を？」

初めて話したとき、煌は美咲の名前を言っていた。それを訪ねると、煌が気まずそうに呻いた。

「それは……」

「いい。私が説明するわ」

煌が言い淀むと晶が口を開いた。

「シヨックかもしれないけど……」

晶は漆黒の、力を宿した瞳で由里を見つめた。

「一和美咲さんが、あなたに呪いをかけた張本人よ」

ずっと、一緒に踊ろう

由里！あのね、はい、これ！

そういつて、渡されたブレスレットを大切に抱いて。

ありがとう！美咲。大切にするね！

幸せだった。すごく、すごく。
大切だった。

ねえ、由里。そのブレスレットはね、誓いのブレスレ

ットなの。

真剣な声音で、美咲は由里の顔をのぞき込んだ。茶色の髪が動作に合わせて、流れる。

私と、美咲がずっと一緒に踊れますように、て

『ねえ 由里。一緒だよね？』

あの刻、誓った。

ブレスレットを着けたほうの手を上にかざして、二人で笑いあっていた。

『誓ったんだから 』

赦さない。赦さない。

私を置いていくなんで、赦さない。

四（後書き）

更新しましたー。

．．．．．第一部より長くなる可能性が大了。

悲しい．．．．．。

一緒に一緒につて、多すぎですね。しつこいくらいに打ちました。
あつはー．．．。

五（前書き）

体調を崩していました……。でも土曜日になってよくなりました。

五

煌と晶は、学校が終わりしだい、すぐに約束の喫茶店に入った。中に入ると人が結構いる。カップルもいれば、友達同士もいた。大抵は高校生だが。

「父さん、いるー？」

何の躊躇ためらもなく、晶はカウンターの向こう側に大声を張り上げる。すると、中からすらりとした男性が出てきた。

「晶。カウンターで大声だすな。営業妨害えいぎょうぼうがいだぞ」

仏頂面ぶつちやうめんで、晶の父、直弥なおやは晶に頭を軽くこづいて、隣にいる煌に笑った。

「よう！煌じゃねえか！親父は元気か？」

「相変わらずの仏頂面だぜ、親父は」

そうかそれは良かった、と笑い飛ばす直弥に、煌も一緒になって笑う。

「端のほうの席、いい？」

「おう！座ってけ。座ってけ」

直弥はそう言つと、カウンターのほうに引つ込んでいった。それを見届け、晶は煌を見る。

「呪い、のことだけど」

「間違いなく、一和美咲だな」

晶が言い終わる前に、煌は即答した。晶がふうとため息を吐く。「なんでそう思ふの？」

「お前の思つてる通りだと思つけど…。あの呪いは、普通じゃない。生身の人間が作り出せるものじゃなかった。だったら答えは一つ…」
人間が人間にかけられる呪いとは、限度げんとがある。しかし霊では、その限度はないに等しい。人間は、特別な術を使わない限り、完璧な呪いなどかけられないのだ。

「理由はどうか知らない。こればかりは、上阪じやうぱんに聞かなきゃな…」

重々しく息を吐いて、煌は窓から外を見た。雨が相変わらず降っている。耳につく音がうるさい。

雨は、やっぱり好きになれないなあ……

そんなことを考えながら、煌は空を見た。

「美咲がなんで……？」

由里は、腕につけているブレスレットを無意識に強く握る。目を見開いて、煌と晶を見つめた。

煌は、由里の瞳を見て、口を開いた。

「それは、俺たちにもわからない。お前の周りでも、お前に関わりの深い人物が死んだことは、一和美咲しかいないだろう？」

その声は、重々しく由里の耳朵をうった。確かにその通りだ。

「でも……」

「生きている人間には、完璧な呪いなんてかけられない。お前の足には、とても強い呪いがかかっている。これは、ただ通りすがりのお前を呪ったというものじゃないんだよ」

霊には、ただ目についた人間を呪う、という奴も確かにいるが、そういう呪いは、これほど強い悪気を出したりはしない。

「なにか、一和美咲さんと交わした……たとえば約束とか、ある？」

横から晶の声がかかる。約束、という単語に、由里の肩は微かに震えた。

「あります。『ずっと、一緒に踊ろうね』って……美咲と」

ブレスレットを強く、強く握りしめた。あの日は、あの声は、今はこんなに遠い。

一緒に、という言葉で、煌と晶が思い出したのは、今年の春におこった、幽霊屋敷事件だった。

還ってきてね

そう、約束して、還ってこれなかった男と、死んでもなを、男を待ち続けた女。

おかえりなさい

あの時の幸せそうな香子の顔が、今も脳裏に焼き付いている。

「その約束が、きつと、一和美咲を縛っている」

頭に浮かんだ推測を、煌はゆっくりと口にした。

「一緒に、と約束したのに、お前はどんどん一和美咲を置いていつて、歳をとり、大きくなっていく…ダンスも、うまくなっていただろう？ たぶん、それが原因だ」

「じゃあ、どうすれば…」

由里は、困惑した様子で煌を見た。瞳が潤んでいる。また、涙がこぼれた。

「本人に、会うしかないだろうな。お前の呪いは進行してる。明日にでも、歩けなくなるぞ」

苦虫を数匹噛みつぶし、よく味わったような顔をして、煌は由里を見る。

「お前も、くるか？」

「…行きます。たとえ、歩けなくても」

由里は、先ほどとうってかわって、煌と晶を睨みつけるように見た。行く、とは美咲の所だ。

「行かせてください」

もう一度、強く言う。煌と晶は、ため息を吐いた。

「…わかった。こういうことは、晶のほうが得意だから、まかせる」

「…そうよね。あんた、細かいこと出来ないもんねー」

呆れた視線を煌に送る晶。煌はごまかすように咳払いをした。

「呪いを一時的に解く札があるの。といっても、ほんの二時間しかもたないけど」

「それでも、良いです」

由里は、強く頷いて、晶と煌に頭を下げた。

「お願いします」

こうして、美咲の墓に、三人はいくことになった。

五（後書き）

更新――。

六（前書き）

く、い、です。。。あ、あ。。。。

六

次の日、由里はダンスの練習中に倒れた。足に激しい痛みを覚え、手を握りしめる。

酷く足が熱かった。病院にいつてもそれは変わらず、医者は原因不明だと顔を顰めた。しかし、由里は原因を知っている。知っているからこそ、これほどにまで冷静になれたのだ。

その日、煌と晶がお見舞いに来た。

「明日、いくから」

煌はそう続けると、目をそらした。それほどにまで、由里はやつれていた。

「呪いが一気に進行したのね…」

晶は眉を寄せて、由里に気遣うような視線をおくった。

「ごめんね。ちょっと、足見せてくれる？」

はい、と由里は頷いた。晶はほ、とした顔をして、由里の足に視線を移す。が、次の瞬間その顔は鬼のようになった。

「煌、病室から出なさい」

「は？なにいつてんだよ。だったら俺見ねえじゃねーか」

「あんた脳みそある！？相手は女の子なのよ！お・ん・な・の・こ！男のあんたに足見られて不愉快にきまつてるでしょ！？」

「知るかよ！」

晶の怒鳴り声が響く。しかし、病室とわかつているので、声の大きさはそこまで大きくない。煌は怒鳴られ、不機嫌そうな顔をして、病室をさった。

晶はため息を吐き、鞆から札を取り出す。その札には、由里には読めない文字が綴^{つづ}られていた。

「ごめんね」

一言声をかけ、晶は由里の足の袖をめくる。

黒い悪気がまとわりついていて。晶の眉間のしわが深くなる。

「酷いわね…とりあえず」

そう言つて、札を額にあて、目を瞑る。なにかを小さく呟き、由里の足にそれをはる。そうすると、なんと札が由里の足に吸い込まれていった。

「これは、前いつていた痛みを二時間とめるやつじゃないわ。進行を遅らせる札よ」

「はい」

強く、由里は頷いた。札のおかげか、前までの痛みより少し、ましになった。

「明日、迎えに行くから」

そう言い残し、晶は病室を後にした。

約束の日、煌と晶は病室に来た。そして、また晶は煌を追いつ出し、由里に札をつける。

そして、三人は美咲の墓に向かった。

美咲の墓場は、彰人^{あきひと}の墓があつた場所とは違う、もう一つ近い墓場にあつた。汚れはなく、綺麗な墓だ。

「これか」

しかし、墓とは裏腹に、そこから出る気配は、とても禍々^{まがまが}しいものだ。

霊感がない由里でも、それはわかつた。なぜか、ここにくると息がつまる。空気がまるで刃のようだ。

「一和、美咲か？」

煌は、墓を見て、言った。否、墓の前に立っている、少女に向かって言つたのだ。

茶色の少し癖のある、肩より長い髪。大きい瞳。本来ならば明るい色を宿しているはずであろうその瞳は、今や黒がかかっていて、精気が感じられない。腕には、由里がつけているブレスレットの色違いの水色をつけている。ブレスレットを大切そうにもう片方の手で握りしめ、彼女は頷いた。

『うん……』

彼女から発せられる気配は、呪いとまったく同じ。服には赤黒いものがこびり付き、周囲には異臭が立ちこめていた。

「なぜ、上阪由里に、呪いをかけた？」

煌の言葉に、美咲は目を見開く。そして、醜く、笑った。

『へえ……お兄ちゃん、由里を知ってるの？』

声は、先ほどの覇気のない声とは違い、うれしさに満ちあふれた、でもどこか不気味な声音に変化している。

『理由……？そんなの簡単よお……』

愛おしげにブレスレットを撫でる美咲に、晶は無意識に脅えを見せた。それに気づいた煌は、晶の手を握った。驚いたような視線を感じながらも、煌は口を開く。

「なぜだ？」

『あの子は 由里は、私を置いていくもの。ずっと一緒に約束したのよ？なのに、なんで？』

美咲の瞳から紅い液体がこぼれ落ちる。

『約束したのよ！だから……私を置いていくなんて赦さないわ！一緒にいるのよ……っ！ずつと、ずつとっつ！』

悲鳴のようだった。呪詛のような言葉を吐きながらも、美咲は泣いていた。

煌は苦しそうな顔をしながらも、札を出す。それは、美咲の魂を強制的に天に送る効力のものだ。

由里は、目を剥いた。いままで、普通の札だと思っていた札から感じる気配を。寒気が全身に駆けめぐる。

「駄目！」

とつさに、由里は晶の前に出た。晶がはじかれたように目をむく。
「なにして…！」

せつかく、今まで美咲は気づいていなかったのに。
煌と美咲の間にはいるようにして、由里は煌を睨んだ。

「駄目です！それを美咲に近づけないで！」

「上阪…！？」

煌も、驚いた顔をして、由里を見た。後の美咲の気配が明らかに
違うものになる。

「ゆ、り？由里…？」

紅い涙を流しながら、美咲は由里の姿を凝視する。
背が、高くなっている。髪が伸びている。

赦せない。赦せない。

『赦せないっつ！』

一段と低い声が、美咲から発せられる。煌は叫んだ。

「馬鹿っつ！一和から離れろ！上阪！」

その言葉は、遅かった。

次の瞬間には、由里は美咲の間に、飲み込まれていた。

六（後書き）

相変わらずの、いたーい展開・・・。
本当、ギャグが書きたいです。なぜこんな真面目な話になるのか・。
・。

七

「ん…？」

由里は、瞼を開けた。目を閉じたときと変わらない闇が広がっている。

「ここは？」

首を傾げて、由里は辺りを見回した。しかし、暗いことに変わりはない。なぜか足がすくんだ。悪寒がする。

目の前に、小さい光が灯った。ほ、としてそこに足をしまったしなから近づく。

「っ…？」

光は青白くともり、ある、由里の記憶を映し出していた。

どうして…！美咲……っ

いやああああああっ！

『ずっと、一緒だよ…』

「い、……いや…嫌…やめて…！」

思い出したくない、記憶が次々と映されていく。幸せだった日々が、失いたくなかった日々が。

『ねえ、由里』

光は消え、また暗闇に戻る。由里の前に小5の時の姿のままの美咲が立っていた。瞳からは、光が感じられない。目からとどめなく溢れるのは、紅い液体。

『約束、したでしょう？なんで…あなたは、大きくなるの？』

「美咲…」

悲しげに顔を歪めて、美咲は由里の首に手をかける。

『赦さないわ。赦さない。私を置いていくなんて、赦さない！』
手に入る力が強さを増す。外見に似合わない力に、由里は驚愕した。

『約束したのよ！一緒にいるの、いたいの。なのに、なんでよお…！』

泣きながら、嗚咽おえつが暗闇に紛れて、消える。

『ねえ、由里、一緒に、いきましよう？』

美咲は醜く微笑した。

「上阪さん！由里！」

晶の悲鳴が、雨の中に響いた。煌はただ呆然と、先ほどまで由里がいた場所を見つめている。

「由里…！由里…」

「落ち着け！晶っ」

錯乱さくらんしている晶の様子に、やっと我に返った煌は晶の肩を揺さぶる。

「落ち着け、上阪は一和いちかずに飲み込まれた。俺たちがヘタに干渉すると上阪が死ぬぞっ」

「っ」

晶は息をつめ、煌を見た。傘がいつの間にか、吹き飛ばされて、二人ともびしょびしょだ。

「俺たちは、ただ、待つことしかできない」

苦しそうな顔をする煌に、晶はようやく冷静さを取り戻した。立ち上がる。

「そう、ね」

悲しそうな顔をして、晶は美咲の墓を見つめる。そして、ふと顔をあげた。

「ねえ」

「？」

「由里は、霊力ないわよね？」

「ああ」

なにを今更、と瞳を丸くする煌は、あることに気づき、声を上げた。

「なんで、あの時札の効力がわかったんだ？あと、美咲の姿も…」

「もしかしたら、霊力に目覚めた、とか…？」

あの時、由里は煌の前に立ちはだかった。煌も晶も札の効力をいってないのに、由里は近づけないで、と叫んだ。それは、札の効力を知っているからこそその発言だろう。

「もしかしたら」

煌は墓を見た。

なんとかなるかもしれない

霊力が、本当に目覚めたのなら。

「美…咲…」

由里は、掠れた声で、親友の名を呼んだ。

七（後書き）

久しぶりの更新です！。

最近はずう話かいてたので、この話かくの疲れました・・・。

八

「美…咲…」

由里は首をしめている美咲の細い手首に、自らの手で握り返す。美咲がおどろいたように目を丸くした。

「ご、めんね…」

掠れた声で、由里は噛みしめるように、言葉を紡ぐ。美咲の手に加わっている力が抜けた。由里は身を起こす。そして、美咲の頬に手を添えた。

「寂しかったよね。ごめんね。美咲」

微笑んで、由里は美咲の頭を撫でる。美咲の瞳から、本当の涙がこぼれ落ちた。

『ゆ、り』

美咲の次々にこぼれ落ちる涙を由里はぬぐう。

「私もね、ずっと、寂しかった。美咲が私の前からいなくなるなんて、考えたこともなかったから」

でもね、と言葉を続ける。

「プレスレットが、あったから。美咲との約束があったから」
だから、ここまでこれた。と

美咲は顔をくしゃくしゃにした。目の前にいるこの親友は、自分が呪ったことを知っているはずだ。なのに、こんなにも暖かい笑顔をまだ自分に向けていてくれる。

「『ずっと、一緒に踊ろう』」

あの刻の、約束を。

「一緒に、いよう？」

笑って、美咲を抱きしめた。触れないけど、確かに、ここに美咲はいる。

「私は、踊り続けるから。美咲を忘れないように、あの刻の約束を忘れないように」

美咲は、由里にすがりつく。そして、何回も頷いた。

「私の憧れは、今も美咲だけだよ」

身体を離して、由里は美咲の顔をのぞき込んで、言った。美咲は、今度こそ花のように微笑んだ。

「由里っ!？」

雨の中、墓の前に突如現れた後輩に、晶は抱きつく。突然の衝撃に、由里は後に倒れた。幸いなことに、墓に頭をぶつけると言うことはしなかった。煌は晶の行動の早さに苦笑する。

「よかった！無事ね!？」

「あ、はい…大丈夫です」

そういつて微笑む由里の腕についているブレスレットに、煌は目を剥く。

「お、おい、そのブレスレット…」

由里のブレスレットには、水色のものもついていた。そして、そのブレスレットには

『さつきは、ごめんなさい。お兄さん、お姉さん』

美咲が、取り憑いていた。

「……………」

煌と晶は、呆然と美咲と由里を見つめた。

『私は、一和美咲です。由里の親友です』

につこりと、年齢特有の笑顔を見せる美咲に、煌と晶は狼狽する。

「え?え…なんで?」

「えーと、美咲が、見守るって言うてくれて……あはは」

最後は笑いでごまかす由里に、晶は詰め寄った。

「見守るって…確かに美咲ちゃんほかの人に見えないし、由里も霊力目覚めてるようだから問題ないんだけど」

「え！？私霊力目覚めてるんですか！？」

「気づかなかったのか…一和が見えている時点で間違いなく目覚めてるだろ…」

煌は呆れた視線を由里に送る。由里は視線を空に向け、美咲がわざとらしく咳払いをした。

『誰がなんと言おうと、私は由里の側にいます』

美咲は、き、と煌と晶を見た。煌と晶は困ったように視線を交わす。

「別にそれはいいんだけど…」

「じゃあ、他に問題が？」

由里は心配げに美咲を見て問うた。晶が唸る。

「美咲ちゃんは、成仏しなくていいの？」

『いいです。私は、由里が一人前になって、大きな舞台で踊って、沢山賞もらって、有名人になるまで成仏なんて死んでもしません！』

いや、死なないも何も、もう死んでるから

とつつこむ勇氣は煌と晶、そして由里にはなかった。美咲は微笑んで、プレスレットに消えた。

「と、いうことです」

ちらり、と由里は煌と晶を見る。煌と晶は苦笑して、頷いた。

「しかたない。本人 いや、本霊？が言ってるんだからね」

でも、と晶は心配げにこちらを見る。

「もしかしたら、美咲ちゃん、すつごく霊力強いから、ほかの弱い霊たちが集まる可能性があるんだけど…」

「え…美咲は、どうなるんですか？」

由里はプレスレットを見つめた。

「大丈夫よ。集まるのは弱い霊だけだから。でも、悪霊が来たら、私たちにいつて頂戴。ちょうだい原因不明で、たとえば急に身体の一部が痛く

なったり、悪寒がしたり…。初めは、医者に診てもらって。それで分からなかったら、私たちの出番よ」

悪戯を思いついたような顔で、晶は微笑む。煌も同じように微笑んだ。

「まあ、原因不明でも新しいウイルスとかだと俺たちでもなんにもなんねーけど」

「そういうこと言わない！」

晶はもっていた鞆を煌の頭に振り上げる。

「いつてー！お前、本当酷いよな！」

「うるさいわねー！」

喧嘩し始める煌と晶に、由里はこらえきれずに笑った。そして、頭を下げる。

「すみません：ありがとうございます、佐々木先輩、井上先輩」

「どういたしまして。佐々木じゃなくて、晶って呼んで」

「どういたしまして！。別に名字じゃなくてもいいぞ」

二人とも、同じことを言う。それがまたおかしくて、由里は笑った。

「そんな：先輩なのに」

「いって。同じ霊が見える仲だし」

笑い飛ばす煌に晶が同意する。

「そうよ。私も名前で呼ぶし」

「：わかりました。よろしくお願いします、晶先輩」

二人に言われてさすがに由里はおれる。改めて頭をまた下げ、微笑む由里に晶は微笑んだ。

「よろしくね。由里」

行きゆく人々が全員振り返りそんな微笑を浮かべる晶に、由里は微笑み返す。そして、煌に向き直った。

「よろしくお願いします。煌先輩」

「ああ。よろしく、由里！」

人なつっこそうに笑う煌に、由里は頬を赤くした。いつも通り普

通に少し笑って返されと思ったからだ。

「は、い……」

顔を覆って、由里は下を向く。その様子に、煌は首を傾げた。晶は、煌に呆れている。

「罪作りな奴」

そう呟かれた言葉は、残念ながら煌には届いていない。

八（後書き）

更新です！。あと一話で第二部は終わります。

九（前書き）

第二部、最終話更新です！

九

その後、由里の足は順調に治っていった。三日後には普通に歩けるくらいに、だ。

煌と晶は、一年の教室のある階を歩いていた。

「由里のクラスって、どこだっけ？」

煌は首を傾げ、晶に問う。晶はくい、と顎で示した。

「ほら。もうちょっとでつくわ…ていうかあんた知らずにここまで来てたの？」

自分より一歩手前を歩いていたので、てっきり知っているとかばかり思っていたのに。呆れてものも言えない状態の晶に煌は笑った。

「そりゃあ、勘で！」

瞬間、晶が馬鹿だ、とおもったのは言うまでもない。

そうこうしているうちに、教室についた。教室をのぞき込み、晶は手をふる。

「由里ー」

「晶先輩！？」

晶と同じく煌もひらひらと手を振る。それに、由里はいささか顔を赤くする。友人に一声かけ、由里は晶と煌の近くまで来た。

「どうしたんですか？一年の教室まで来て」

「大丈夫かな、て思ってた」

ちらり、と晶はいつも由里がブレスレットをはめている腕を見た。学校だからつけていないが、ポケットの中に両方のブレスレットが入っている。

「大丈夫ですよ。異常なしです」

そう言って微笑む由里に晶は安堵したように胸をなで下ろした。

「よかった」

煌も安心したように息をはく。

「じゃ、なにかあったら、言ってね」

「絶対だぞ」

晶の言葉に重ねて念押しすることを忘れない煌。おかしくて、由里は笑って頷く。

「はい！」

そして、二人は二年の教室に戻っていた。その後、由里はクラス的女子だけじゃなく、男子にまで囲まれた。

「ねえ、ねえ、由里、どういこと！？」

「なんで佐々木先輩と井上先輩と知り合いなの！？」

「あの二人、付き合ってるの！？」

「しかもあんた、名前で呼んでなかった？」

「どーいこと！？」

一気に質問が飛び交い、由里は驚きに目を見張る。しかし頭は冷静だった。

あの二人、すっごい有名だもんねー

思わず天井を見上げそうになる。しかし、ある質問で動きがとまった。

「どーい関係なの、あんたと先輩たち！」

その質問の答えは一つ。由里は微笑んだ。それが、今までのものより大人びていて全員の動きが止まる。

「あの二人はね……」

由里は、ポケットの中にあるブレスレットを握りしめた。

「私の、恩人なの」

由里は、学校が終わり、家への帰り道を一人で歩いていた。その隣には、美咲がいる。

「ねえ、美咲」

「なにー？」

美咲は由里を見上げた。由里は、微笑んだ。

「私ね、美咲にあえて良かった」

その言葉に、美咲も微笑む。

「私も、由里にあえてよかった！」

由里の家は、もうすぐそこ。

その家の庭には、雨に打たれながらも、美しい水色の紫陽花あじさいが咲いている。

第二部 久遠の刻を 舞い踊る 完

九（後書き）

第二部、完結ですー！

一部より一話だけ長いという形となりました。

では予告おば。

近々（？）更新予定の第三部の題名は

荊の途を 突き進め（いばらのみちを つきすすめ）です！

二部よりいつそう暗くなる予定が大です！あはは

荊の途を 突き進め 一

お前は、俺を恨んでいるだろう

憎んでいるだろうか

それもそうだろう

憎んでも 恨んでも 構わない

それが、俺のした罪 相応の罰だ

九月中旬。寒い風が頬をかすめる。晶が顔を思いつきりしかめた。
「さむっ」

「言わなくても分かってる」

晶の呟きに、煌は小さく返した。しかし、小さくても聞こえたらしく、容赦なく鳩尾に拳がねじり込まれる。

「っっ」

煌の声にならない悲鳴を黙殺し、晶はさっさと歩いた。煌は恨めしげに晶を見る。

「寒い寒いっていうから、寒いんだよ」

「それでも寒いのに」

煌がため息を吐く。晶はつん、とそっぽを向いた。

「あ、先輩」

ふと、顔を上げる。そこには寒いなか大きく手を振っている由里の姿があった。由里とは、六月の幽霊事件で知り合い、その時いろいろあつて霊力が目覚めてしまい、以来こうして一緒に登校しているのだ。由里の傍らにはいつも、美咲という霊がついている。美咲も、微笑んで軽く頭を下げた。

「おはよう。由里」

「おはようございます。晶先輩、煌先輩」

煌の時の態度とはうってかわつて、優しい笑顔を向ける晶に、なぜか鳩尾を押さえている煌。由里はここにくる前の出来事にいたい予想がつき、苦笑した。

「さ、今日もいくんだよね？」

美咲は嬉しそうに微笑んで、晶を見上げる。行く、とは、霊に花をあげることのことだ。

「ええ」

晶は同じように微笑んで、美咲の頭を撫でる。

「さっさと行くぞー。今日はいちだんと寒いからな」

そう言うやいなや、煌はさっさと踵かかとを返して、目的地に黙々と歩いていく。晶と由里も、後に続いた。

『お姉ちゃん、お兄ちゃん、由里ちゃん、美咲』

少女は、ほ、としたように微笑んだ。美咲だけ呼び捨てなのは、歳が近いからだろう。美咲も、この少女のことを気に入っているらしい。いつも、楽しげに笑いあっている。由里も、同じだった。

「おはよう、リサ」

『おはよう！』

リサ、という名は、美咲がつけたものだ。名前が思い出せない、と言った少女に、美咲が名をつけた。彼女たちより付き合いが長い煌たちは、そんなことにすら気づかず、気まずい思いをしたが、リサと由里と美咲に笑われて終わった。

「それじゃ、そろそろ行くね。美咲」

『はい』

愚図る美咲に一声かけ、由里はミサに手を振った。ミサは笑顔で、煌と晶を見る。

『今日も、ありがとう。こんな綺麗な花……』

そう言つて、リサはちらりと花瓶を見た。そこには、鮮やかな赤の彼岸花ひがなばなが咲いている。

「道ばたで咲いてたから、ちょっと拝借してみた」

そう言つて、悪戯気に微笑む煌に、ミサはくすくすと笑う。

『それじゃあね。また明日』

「うん、また明日ー」

晶も手をふり、四人は学校に向かった。

俺が お前の人生を奪った

憎いだろう

恨んでいるだろう

罪には 罰を

荊^{いばら}が 身体に巻き付く

荊の途を 突き進め 一（後書き）

第三部、更新です！。とりあえず一話目はまだ明るい！よかった・
！

煌と晶は、家への帰り道を歩いていた。寒い風が頬をうつ。晶は思わず息をはいた。

煌は、晶より一步前を歩きつつ、ふと横を見る。

そこには、少し寂れた家があった。庭は雑草が生い茂り、手入れをしていないと思える。しかし、その庭で一つだけ、念入りに手入れがされているところがあった。

彼岸花……

深紅の美しい彼岸花が咲いていた。思わず息をつき、その花見入る。それに晶が気づき、声をかけた。

「煌、なにしてるの？」

寒いせいで、その声はいつもより少々ふるえている。煌は顔をあげ、微笑んだ。

「いや、なんでもない。さっさと帰るか」

そう言って、進む。しかし、それは次の扉があく音で止まった。

寂れた家の扉からでてきたのは、三十代前半の男だった。漆黒の髪に、濁った黒い瞳の下には、くつきりと隈が浮かび上がっている。全体的に細く、今にも倒れそうだった。そして、なにより二人が入ったのは、男の体に巻き付いているものだ。

荊……？

濃い緑の、鋭い棘のある荊が、男に巻き付いている。強く、強く。まるで、罰を与えるように。男はまるで平然としているし、これは二人しか見えないものだとはわかった。しかし、霊という気配ではない。霊より、濁っている、不吉な気配。

なんだ…これ…

煌は眉をよせて、男を見た。男はその態度を気にした風もなく、少し微笑んで、軽く頭を下げた。そしてそのまま、どこかへ行く。

煌と晶は、しばらく、男のいった方向を見ていた。

「ただいまー」

「おじゃまします」

煌と晶の声が重なる。晶は靴を脱いで、家にあがった。煌もそれに続く。煌は一回自宅に帰り、鞆をおいてきたが、服は着替えていないため、制服だ。

奥のリビングから、人が出てきた。

年頃は、煌の母、晃と同じだろうか。漆黒の髪は腰に届くまで長く、肌は白い。大きい瞳は漆黒で、顔立ちは晶にうり二つだ。

晶の母、梨花はふわりと微笑む。

「おかえりなさい。晶。いらっしやい煌君」

その声はまるで、鈴のようだった。とても中学二年生の子供をもっているとは思えないくらい、少女のような声だ。

「ただいま、母さん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「いいわよ」

晶が真剣な顔をして、母になにかを訪ねる時は大抵、霊関係だ。

梨花は苦笑して、二人をリビングに通した。

晶と煌、梨花も椅子に座り、晶が口を開く。

「母さん、体に荊が巻き付いている人、今日見たんだけど…なにか、その人に影響を及ぼすの？」

その言葉を聞き、梨花は目を見開く。おもむろに立ち上がり、机にばんと手をたたきつけた。

「その人は、今、どこに？」

低い声が響く。いきなりの変貌に、煌と晶はとつさに声が出なかった。しかし、晶が立ち直り、答える。

「し、知らない……」

首を横にふって、晶は言う。梨花はため息をはいて、椅子に座り直した。

「…晶、それに煌君。よかったわね、無事で」
「は？」

二人そろって怪訝な顔をして梨花を見る。梨花はふうとため息をはいた。

「体に荊が巻き付いている人を見たのね？」

「う、うん」

晶はとまどいがちにうなずく。

「それは、人をその手で殺したことのある人間の証
の印よ」

罰

その声は、今まで以上に室内に響いた。

煌と晶は呆然と、梨花を見つめることしかできなかった。

お前は、俺を憎悪しているだろう

嫌悪しているだろう

しかたのないことだ

たとえ世間が、『事故』だと片付けても

俺がお前を殺したという事実は変わらないのだから

二（後書き）

久しぶりの更新です。

暗あーい感じに・・・。

三

次の日。

煌は、ぼーと黒板を見つめていた。周りの音がどこか遠くに聞こえ、現実感がない。

前にいる先生が、まるで人形のように見える。口だけしか動いていない。なにを言っているのかわからない。

煌は、昨日の梨花の言葉を思い出していた。

『それは、人をその手で殺したことのある人間の証
の印よ』
罰

頭の中で、声が反響する。

目をかたく閉じて、耳を強くふさぎたい衝動にかられるが、それはしない。できない。

あつたのは、昨日。そう、昨日なのだ。初対面で、話したことすらない。そんな相手。
なのに

あの瞳は
：

あの瞳は、どうしても、人を殺した人間には見えない。

よんだ、ひどく憔悴^{しょうすい}しきった瞳。目のしたにくつきりとした隈。それが仕事の疲れというならば、納得がいくだろう。だが、とてもそうとは思えない。

弱々しく、今にも壊れそうな姿が、脳裏に焼き付く。

ひがんばな
彼岸花

彼岸花の、花言葉。どうしても気になったのだ。あの庭に、ひとつだけ綺麗に、念入りに手入れされてあった花は。

『悲しい思い出』

それが、彼岸花の花言葉。

授業が終わり、次々と生徒たちは教室から出て行った。それを見つつ、煌は、ため息をはく。

晶も、同じように下校する生徒を見送っていた。残ったのは二人だけだ。長い沈黙が二人の間でうまれる。

それを破ったのは、煌だった。

「いくか？」

確認の言葉が響く。どこにいくか、とはいっていない。しかし、晶にはその意味がわかった。なにせ、同じことを自分も言おうとしていたからだ。

「ええ、いくわよ」

晶の声が、耳朵に響く。

「だって、知りたいんだもの」

彼のあの瞳の意味を。

悲しげなあの目の意味を。

「勘だけど、俺は」

煌が窓から空をにらむように見上げた。そして、口を開く。

「初めてあったあの人が、人を殺すようには見えない」

友達、だった

俺とお前は、親友だった

今でも、そう、お前は言えるか？

俺のことを、親友だと

『ほら、なにやってる。さっさといくぞ』

のばされた手を、とったのは

『優汰、^{ゆうた}か……？久しぶりだな！どうしたんだ、このごろ、学校も
こずに』

楽しそうに微笑んだ顔を

声を

もう二度と、みることは、きくことはできない。

『く…る、な……』

あの時、なぜ俺は

『くるなああああつつつ！』

お前を

スローモーションのように、

彼の体は

宙をういた

そして、次の瞬間

目の前が、

朱^{あか}に染まった

「勝吾……」

暗闇の中、男は、静かに涙を流した。

三（後書き）

中身の薄い更新ですみません・・・

わりといつものことだ？はっはーそんなことはない・・・と思います

とりあえず、この話は罪がテーマなのですが、なぜか友情がテーマになりつつあります。第二部とかぶる・・・っ！

四（前書き）

ようやく9日にテストが終わりました。
感動で一日寝れる気がします。

四

煌と晶は、あの家の前に来ていた。

庭には綺麗な彼岸花ひがんばなが咲き誇っている。花にどうしても目がいき、煌と晶は男がくるまでずっとそれを見つめていた。美しい赤はまるで、血のようだ。

「あ……」

煌は足音が聞こえたので顔を上げた。そこには、昨日のあの男がいた。昨日と変わらない様子で男は歩いてきた。

「君たちは……昨日の子だね？」

男から発せられる声は、少し掠れた低い声だ。晶も顔をあげ、一礼する。

なにか話そうとしても、どうしても、のどにつつかえる。目は、男の体に巻き付いた荊いばをどうしても見ってしまう。二人ともなにも話せず、ただ男を見ているしかなかった。

すると、男は首をかしげ、淡く微笑んだ。そして、体に巻き付く荊に手をかける。

その行動に、煌と晶は息をのんだ。
男が口を開く。

「君たちも、荊これが見えるのかい？」

煌と晶は、言葉を失った。

「見える、ということは、この意味も知ってるのかな？」

男は困ったように微笑むと、荊から手を離れた。鋭い棘をもった荊なのに、手には傷ひとつつかない。

「まあ……ここにたったままは言いにくいことだし、家にはいる？ お茶くらいならあるけど」

絶句したままの煌と晶に、男、優汰は、ああと呟いた。

「殺人者の家になんか、入れないか」

自嘲した笑みを浮かべ、優汰は扉に手をかける。煌と晶はあわて、言った。

「す、すみません！まさか見える人とは思わなくて」

晶の言葉に、優汰は首を傾げる。

「見える……これのことか？」

優汰は不思議そうな顔をして、荊を指さす。煌はうなずいた。

「はい……てつきり見えないとばかり・・」

「そりゃ、こんなものほつといて、普通に歩いてたしね、俺」

笑って、優汰はどうぞ、と扉をあけた。煌と晶は家にためらいもなく入る。

中は、案外綺麗だった。廊下をまっすぐあるいて、リビングにでる。リビングは明かりがなく、日光だけだ。

「じゃ……まず質問をきこうか」

優汰は煌と晶に席を勧めたあと、自分も椅子に座り、二人を見た。

「一つ、あなたは、その荊の意味を知ってるのですね？」

晶の問いに、優汰は微笑む。

「ああ。しってるさ。わからないわけがない」

これは

「俺の、罪の罰だ」

あいつを、殺した

俺に下された、罰

「二つ」

煌の声が、静かな、無音なりビングに響いた。

「あなたは、なぜ、」

声が途中で震える。拳を強く握りしめた。

一回黙り、そして煌はおそろるおそろる言葉を紡いだ。

「人を殺したのですか？」

優汰は少し、沈黙した。顔をふせ、自分の手を見る。否、手に巻き付いた荊を。

ゆっくりと手を握り、そして、顔を上げた。

「俺は、あいつが憎かったのかもしれない」

だから

あの時

「あいつを妬んでいた。心の奥底で、ずっと」

俺と正反対にいるような、人間だった。
関わることもない、そんな人種だったのに。
いつ、なにが始まりで

俺とあいつは仲良くなっただろうか

「だから、殺したんだ」

世間が『事故』とかたづけた、あの瞬間が

今もなお、脳裏にこびりついている。

体が車とぶつかる鈍い音。

周りの人間の叫び声

女子供の泣き声

そして

そして、なにより

あいつの

。

歪んだ、半分が朱く染まった、あの顔が

四（後書き）

ずっと書きたかったシーンをようやくかけました。
この話でなにがあったかすぐわかるという事実。

五

あいつと、初めて話したのは屋上でだった。

明るく、元気で、運動も、勉強もできたあいつ、勝吾しんごはクラスの中心な存在だった。

対する優汰は、あまり周りとしやべらず、いつもクラスで一人だった。勉強はそこそこ。運動も普通だった。二人は正反対だった。ずっと、関わり合いにならない、そんな人種だったのに。

「なにしてんだ？」

屋上で猫柄つて、空を見上げていた優汰の視界に、見覚えのある顔が入り込んできた。首を傾げて問うてくる相手に、優汰は目を見張り、勢いよく起きあがった。

「おわっ！？」

相手も驚いて顔を引つ込める。

大きめの漆黒の瞳に、少し茶色の混じった髪、日に焼けた褐色の肌。

おおきた
大北 勝吾。

確かそんな名前だったはずだ。

いつも笑顔で明るく、クラス、嫌、学年で人気の男子。

そんなやつがなぜ屋上に、と優汰は眉を寄せる。静かな場所が好きな優汰は昼休みは教室にいず、ここにいることが多い。

対する勝吾は教室か、他のクラスにすることが多いはずだ。
なのに

「お前：確か、森河優汰もりかわだよな」

勝吾はまじまじと優汰の顔を見た。

漆黒の髪に、黒い瞳。髪と瞳を目立たせるような白い肌。細い体た軀く。まるで病人のようだ。

「そうだけど……。あんたは、大北 勝吾？」

「そうそう。よくしってんなぁ！」

「……それはあんたもだよ」

なにが楽しいのかにかりと笑う勝吾に、優汰はあきれた視線を送る。自分のことなんて知らないと思っていたから、内心結構驚いてはいるが。

優汰は学校で目立たないように、なるべく暗く振る舞っている。

勝吾が自分の存在を認知しているとは思えなかったのに。

「で、優汰」

「いきなり呼び捨てかよ」

「それは置いといて！なんでこんなとこにいるんだ？」

首を傾げて不思議そうにこちらを見る勝吾に、優汰は眉をよせた。

「教室、うるさいから嫌だ」

「なんだそりゃ。幼稚園児みたいなこと言うなよな」

「お前に言われたくない」

優汰はじろりと勝吾をにらんだ。勝吾はどこと吹く風とでも言うようにほけほけと笑っている。

「なぁなぁ！」

「……なに……？」

面倒くさそうに勝吾のほうを振り返る優汰に、勝吾は指さして笑った。

「今日からお前、俺の『友達』な！」

「……………は？」

それが、始まりだった。

「あいつはそれから、教室に入ってから一番に俺に話しかけたよ」
懐かしむように笑う優汰は、楽しそうだった。

煌と晶は、あまりにも勝吾強引さに苦笑する。二人は自覚なしだが、煌と晶も同じくらい強引だろう。

「毎回、毎回、飽きもせず、あいつは俺のところに来た……」

優汰！

脳裏に浮かぶ、あの時の友の姿。

「次、数学か……。俺苦手なんだよね」

「それは俺に対する嫌みか。嫌みだな。この野郎」

「なに一人で話し進めてんの？ 優汰」

「……………」

チャイムと同時にこちらに来た勝吾のつぶやきに思わず優汰はつつこんだ。

成績優秀のこいつが、数学が苦手なんて嫌みにしか聞こえない。

「嫌みではねーよ。ほんとほんと。俺、数学の点数、一番低いし」

「その低いはどれくらいの点数なんだ？」

「70点代」

「あー……殴りてえ。この男」

思わず握り拳をつくり、不吉な言葉を吐き捨てる優汰に、勝吾は笑った。

「そう怒んなって！仲良くしようぜー優汰」

「勝手にほざいてろ」

肩にかかっている勝吾の手をうつとうしげにふりはらい、優汰はすたすたと移動教室に向かう。数学は教室が分かれているのだ。

勝吾もなんなく優汰の隣まで歩いてくる。

「よし、一緒にいくかー」

「お前本当、なんなんだ！？」

結構早歩きできたぞ俺！と叫ぶ優汰に勝吾は笑った。

クラスの人気者の勝吾が、クラスに馴染まない優汰と一緒にいる。それはやっぱり周りの反感を抱かせた。

「なあなあ、勝吾」

クラスの男子が、優汰と話している勝吾に割り込むように話しかけた。

「なに？」

勝吾は男子をみて、眉を寄せた。

「なんで、森河（しんが）と仲良くしてんだよ？」

優汰を輕蔑^{けいべつ}するように見て、男子は吐き捨てた。優汰はその視線をただ受け止め、ふいと視線をはずす。まるで相手にすらしないように。その行動に、男子のいらだちが余計募^つる。周りのクラスメートもこの三人に注目していた。皆、不満を募らせていたのだろう。優汰に向ける視線が冷たい。

勝吾は、男子の額におもむろに指を当てた。
そして、その額を指弾^{したん}する。男子は驚きに目を見張った。

「お前に関係ないだろ？俺が誰と仲良くしようと。もうこんな下らないこと、聞くなよ。その質問は」
勝吾は微笑んだ。心なしか声がいつもより低い。

「相手を不愉快にさせるものだから」

そう言うと、勝吾は優汰に向き直った。勝吾の変貌に驚いていた優汰は顔が引きつっている。

「ほら。なにぼけーとしてんだよ。優汰」

先ほどのことなど微塵^{みじん}も感じさせない声音。

「さつさと次の授業の準備しないと、先公がくるぞー」

冗談まじりに笑う勝吾の背後から、低い男の声が響く。

「だあーれが先公だあ？大北あ……」

地をはうような声に、勝吾の肩がぴくりと反応する。のろのろと後ろを振り返ると、予想通りの先生の顔が。

「あつはー…すみませんでした！」

先生は速攻で謝る勝吾の首根っこをつかみ、問答無用で廊下に引きずっていった。

それを優汰はあつけにとられた様子でみていたが、やがて、哀れむような視線を廊下に送った。

五（後書き）

さすがに・・・前々回と前回の話の内容が薄かったので。更新しました。

勝吾と優汰の友情編です。

今コメディですが、次からシリアスになります・・・。

六

月日はすぎ、優汰は中学三年生になった。

前とは違い、勝吾と仲良くなつてから、優汰はクラスメートと話すようになった。すこしずつ仲良くなり、学校生活も楽しいと思えるようになっていった。しかしそれは二年までだった。

受験というものがあるこの学年。学年全体が暗くなる三年後期の時期でも、勝吾は明るかった。

勝吾はいつも通りの明るさで皆と接していた。でもその反面、授業には集中して参加している。

優汰はまるで勉強に手をつけられなくなった。

頭に内容が入らず、わからなくなる。いくら勉強しても、テストの結果は下がるばかりで、学校に行けば、頭の良い、テストの点数の良い、明るい、自分と正反対の親友がいるのだ。

学校に、いきたくない

足が動かない。硬直して、頭ではいかないといけないとわかつているのに、体が拒否する。

少しずつ、優汰の精神は壊れていった。

「優汰……少し、外に出てみたら？」

学校にいかなくなつてから、もう一ヶ月が過ぎる。ある日、母が心配げに言った。

「ずっと家にいたら、良くならないでしょう？少し、外の空気を吸えば、気分が楽になるわよ」

そう言って優しく優汰の肩に手を置く母の瞳を少し見て、優汰は覇氣はきのない声で答えた。

「わかった…じゃ、ちょっと出てくる」

手を小さく挙げ、優汰は玄関までゆつくりと、おぼつかない足取りで歩いていった。母はその背中を心配げに見ている。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

しっかりとした声で言うと、母は安心したように微笑み、優汰を見送った。

優汰は、学校へと行く道とは反対方向を歩いていった。

ふと、店のガラスを見る。自分の姿が映っていた。

くつきりとした隈くまがついている、濁った黒をした自分の瞳。もともと白かった肌は青白く、まさに重病人の姿を写し取ったかのようだ。

自嘲じやうぢやうした笑みを浮かべる。

その時、後ろから、聞き慣れた、しかし懐かしい声がかかった。

「優汰、か…？」

驚いて、後ろを振り返る。

濁った瞳に映ったのは、見慣れた姿。

日に焼けた褐色の肌、漆黒の瞳に、出会ったときとは違い、茶の多くなった髪。

自分の部屋に放置してあるものと同じ制服に身を包んだ、勝吾だった。

「しょ……じ……」

掠れた声で、親友の名を呼ぶ。握りしめた手に汗がにじむ。心臓の音が妙に五月蠅く耳に響いた。

ごくりと唾を飲み込んで、優汰は目を見開いた。

「やっぱり、優汰だ！よかった人間違いだったらどうしょーかなーって思ってたんだ」

相変わらず人なつっこそうに笑って、こちらによってくる勝吾の顔を、優汰は呆然と見ていた。

勝吾の話を聞いているはずなのに、頭に入らない。

口だけが動いているように見える。頬に汗が伝い落ちた。

「にしても久しぶりだなー。優汰。どうしたんだよ？学校こずに」

心配してたんだぞー。俺もクラスのみんなも、と苦笑まじりの言葉。それも、優汰に耳にまったく響かなかった。

「た、優汰？大丈夫か？」

気づいたときには、すぐ近くに勝吾の顔があった。心配げにのぞき込んできた顔に、びくりと肩を震わす。

「優汰？　大丈夫なのか？」

さすがに笑うのをやめ、真剣な顔をして、勝吾は優汰の頬に手を伸ばそうとした、その瞬間。

目の前が真っ暗になった。

「く、くるなあああああっっっ！」

優汰は狂ったようにそう叫び、勝吾を突き飛ばした。
その時、はつと我に返り、突き飛ばされ驚いた顔をしている勝吾を見た。

優汰は、最後に勝吾のいっばいに見開かれた瞳を、同じように目を見開いてみていた。

そして、次に目の前に広がったのは、朱。

車の近くに転がっていたものは、もはや優汰の知る勝吾ではなかった。

不自然におれまがった骨、見開かれた瞳。そして、

道路に飛び散った、朱。

「あ……あああ……あああ……っ」

優汰は首を左右に振り、その場で座り込んだ。
目頭が熱い。

「あああああああああああ……っ！」
声にならない悲鳴をあげ、優汰はその場で失神した。

「……その出来事は、裁判で『事故』としてかたづけられた。…俺はその時、ノイローゼになりかかっていたから。一年を病院で過ごした」

「」

優汰は、無言の煌と晶を見て苦笑し、ひとつ息をついた。

「…病院を退院した後、引っ越したんだ」

ここには居づらかったから、俺も、親も、と続ける優汰の顔には、後悔の色がにじみ出ている。

「勝、吾さんの…親には……」

「謝りに行ったよ。と、いつても聞いてもらえなかったけど。顔をみた瞬間に門前払いされたよ」

諦めたように笑い、優汰は頭を掻いた。

煌と晶は、何を言っているかわからず、ただ無言で優汰を見つめていた。こういう時にかける言葉がわからないとき、すごく歯がゆさを感じる。うつむき、煌は手を強く握りしめた。

「たとえば、世間が、警察が、『事故』と片付けても」

優汰はゆっくりと、かみしめるように、後悔するように、言葉を続ける。

「俺が、勝吾を殺したんだ」

後悔しても いくら謝罪の言葉を述べても

お前には もう二度と届かない

六（後書き）

暗い、です……。。

こういう展開にする、と決めていましたが、実際かくとまったく暗くなりまして……。ああ……。。

事故と片付けられたあたりは裁判とかそういうの全然知らないの
で、完璧私の想像です。実際事故となるかとか知りませんので、ご
了承ください。

七

「……ありがとう」

優汰は、話おえた後、小さく呟くように言った。その言葉に、煌と晶は目を見開いた。

「え……？」

「話を、聞いてくれたから。少し、すっきりしたよ」

そう言つて、力なく微笑む優汰の姿に、煌と晶は心が痛んだ。その後、煌と晶は家に帰った。

雑草が生い茂っている庭には、やはり彼岸花が咲いていた。美しい紅色をした花に、煌は思わず目をそらす。なぜか、その花を直視できなかったのだ。それは晶も同じなのか、気まずそうな顔をしている。

「ねえ、煌」

「ん？」

ためらいがちに晶は言葉をつづける。

「少し、寄り道しない？」

その誘いを断る理由は、煌になかった。

「おう」

そう返事すると、晶はほっとしたのか、安心したように少し微笑んだ。

煌と晶が寄り道に選んだ場所は、神社だった。神社は寺と違い、霊がない、数少ない場所だ。いつも清められ

てあり、幼い頃は、周りに嘘を突き通すことがしんどくなった時など、よくここに二人で行っていた。

しかし、最近はそういうこともなくなり、ここに来ることもなくなっていたのだ。久しぶりに鳥居をくぐり、煌と晶は階段に腰を下ろした。

沈黙が二人の間に流れる。鳥の鳴き声が妙に響いた。

「…あの、ね」

晶の声が、沈黙を破った。

「私…わからないの」

なにが、とは煌は聞かなかった。ただ、晶の言葉を聞くだけで。

「人を殺す、そんな人の心が　でも」

晶は一つ、一つ、かみしめるように言葉を続けた。

「人を殺すことは、重罪。それはわかってる…でも…優汰さんは、違うでしょう？」

俺が、勝吾を殺したんだ

悲しげに、そう言い切った、あの人は。

「わからない…なんで、あの人に…荊が…」

晶は首を横に振った。

「おかしいでしょう!？」

耐えられなくなったのか、晶は悲鳴に近い声を上げた。

「…それでも、優汰さんは、その罪を受け入れたんだ」

煌は、晶の頭に手を置いた。いつもより、低い声が晶の耳朶をうつ。

「でも…っ」

なおも言いつのろうとする晶の言葉は、最後まで続かなかった。

「あ」

二人が今座っている階段は結構高い。この神社につくまで、そうとう急な坂道を通った。

その坂道は二つに分かれていて、まっすぐなほうを通ると、この神社に行ける。

坂道の曲がり角で、晶と煌は、優汰の姿を見つけた。

しっかりとした足取りで進む優汰の顔はここでは見えないが、間違えるはずがない。

間違いなく、優汰だった。

「行くか」

煌の一言により、二人は優汰の後をついて行くことになった。

優汰はすたすたと慣れているのか、その道をしっかりとした足取りで進んでいた。

煌と晶はいままで行ったことがないこの道に優汰を見逃さないように慎重に進んでいく。

まるでストーカーだな……

煌はそう思いながら、進んでいった。

しばらくすると、そこには川があった。見るからに深いその川の水はどす黒い色をしている。煌の晶の通っている中学校の池よりひどいその有様に、晶は思わず顔を引きつらせた。

優汰はその川の前で止まると、ふいに空を見上げた。

「ごめんな……」

謝っても、届かないかもしれないけど。
それでも

謝っても赦されないとしても。
それでも

この言葉を、お前に贈ろう。

「お前といれて、楽しかった……」

お前のおかげで、学校にいくのが楽しかった。
お前のおかげで、白黒だった世界に光りがさした。

「ありがとう」

そう言う優汰の声は、優しく耳に響いて。
煌と晶は目を見開いた。

優汰はそのまま、川に身を投げようとしたのだ。

深く、流れが速いこの川の中に入ったら、さすがに助からないだろう。

優汰の体が、川に入った。
ぼちゃん、と水がはねる。

煌はそれを追うように、川に飛び込んだ。

「煌っ！」

晶の悲鳴が、空に響く。

ごめん

ごめん

ごめん

そして

ありがとう

七（後書き）

土曜日から冬休みです。うれしいー。

とりあえず、次の話で第三部終わります。

八

苦しい

優汰は思わず、両手で水をかいた。本能が、生きたいと願った。それでも水の流れがそれを赦さない。これでよかったのだ、と言

い聞かせても、本能が、体がそれを無視する。

よろしくな、優汰！

思い出すのは、初めて会った時。

記憶がフラッシュバックする。楽しい思い出、悲しい、苦しい思い出。幸せだった日々が。

勝吾……！

苦しそうに、優汰は顔を歪めた。目頭が熱い。

ごめん

ごめん

ごめん

ごめん

できることなら、会いたい、と。会って、そして、血を吐くように謝りたかった。赦されないとは思っけれど。それでも、勝吾の親より、自分の親より、勝吾自身に、謝りたかった。

なんなら、殺されても構わない。

勝吾を『殺した』あの日から、優汰は、いままで見えていなかった

たものが見えるようになっていた。はじめ、勝吾の呪いだと思っていた。体に巻き付いてとれない荊が、優汰の体を蝕んだ。

でも、年を重ねるうち、これは『罰』だと思い始めた。年々食い込んでいく荊が、罪の象徴のように思えた。

なら……

それなら、自分は甘んじて、それを受けよう。

殺した、それは紛れもない事実だ。この手で、勝吾を殺した。

呪いでも、罰でもなんでもいい。

ただ、自分がこの『罪』から逃れられないように、そうするためならなんでも良かった。

意識が遠くなってきた。うつすらと目を開けると、濁った世界が目の前に広がっていた。草が顔に当たる。自然と、優汰の顔がほころんだ。

霊が見えるようになって、何度も何度も勝吾を探した。でも、見つからなかった。勝吾の家へいっても、自分の背後を鏡から見ても、それが悲しくて、同時に安堵した自分を嫌悪した。

新しく転入した学校には馴染めなかった。そのまま友人一人作らず、平凡な大学をでて、ここに帰ってきた。

そして、ここを見つけたのだ。

仕事もせずに、自分はずっと自殺する場所を探していた。

ようやく、償える

勝吾、勝吾、ようやく、俺は

償える、罪を、罰を受けて

ふ、と体が安心するぬくもりに包まれた。目をあけると、透けている腕が見える。顔を巡らせると、そこには会いたいと思っていた人物の顔が、あった。

「しょ……ご……？」

口に水が入ることも忘れて、優汰は目を見開いた。勝吾は、優汰の記憶の中と変わらず、人懐っこい笑顔を浮かべて、優汰の額に指を打った。優汰は余計驚いたように目を丸くする。

『じゃあな、優汰。俺も、お前といれて、楽しかった』

だから、もう、いい。

そういつて、勝吾は優汰を抱きしめていた腕をゆるめ、水にかき消えた。

「勝吾っ！」

優汰は腕を伸ばそうとしたが、届かなかった。とたん、優汰は強い力に引つ張られ、川から出た。

「はぁ……はぁ……大丈夫、です、か……」

優汰の腕を引つ張ったのは、煌だった。煌の服もびしょぬれで、優汰も同じだった。

「なん、で……」

「それはこっちの台詞です。優汰さん」

後ろから、晶の声がした。振り向くと、そこには今にも泣きそうな顔をした晶がいた。

「優汰さん」

息を整えた煌が、優汰を見る。

「優汰さんが助かったのは、勝吾さんのおかげですよ」

「え……？」

優汰は、自分の体を見た。まだ思い出せるぬくもりに、目から一筋の涙が伝い落ちる。

「死のうとしないでください。それこそ、罪から逃げている。あなたは、罪を、いいや、罰を受け入れたんじゃないんですか！？自殺なんて、罰から逃れるためにすることです！償いなら、あなたはずっとしてきていた。罰を受け入れ、勝吾さんのぶんまで生きることが、償いです！」

煌は声を荒げて、言葉を続けた。肩で息をしつつ、ふう、と息を吐く。優汰は、憑き物が落ちたかのような顔をして、自分の両手を見つめた。まだ、荊が巻き付いている。

目頭が熱くなり、両手が歪んで見えた。

「……っ」

優汰はうつむき、涙を流した。ぽたぽたと頬から涙は伝い落ち、地面を濡らす。

「……勝吾……」

友人の名を小さくいい、優汰は顔をあげた。涙で濡れた顔に、笑みが浮かぶ。

「そうだな……、俺は、逃げてた。助けてくれて、ありがとう」

煌と晶は、安堵の笑みを浮かべた。

この罪を、

この罰を

俺は甘んじて受ける

罪の象徴を掲げて、俺は

この先、自身の天命まで、生き続けよう

たとえ、それが

荊の途だとしても

優汰は、煌と晶に別れを告げ、家に向かった。小走りで家の前ま
で行き、ドアの取っ手に手をかける。すると、荒れ果てた庭に咲く、
彼岸花を見た。

鮮やかに咲いている彼岸花を見つめた後、優汰はほほえみ、家へ
入る。

彼岸花は風に打たれながらも、秋の間、枯れることなく、咲き誇
った。

八（後書き）

第三部、完結です。

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました！

なんとか、イメージが罪、になっているでしょうか・・・。

それでは次回予告を！

なんと、次回はシリーズ（？）最終章！

第四部 『煌く想いと 咲いて散る花と』です。

ちなみに煌く、はきらめく、とは読みません。かがやく、と読みます。

本当は煌くは2010年に終わらせなかったのですが・・・無理でした。

煌く想いと 咲いて散る花と ー（前書き）

シリーズ、最終章、開幕。

煌く想いと 咲いて散る花と 一

「いやだ…っ…春季…っ」

5から6歳頃の少年が、親に抱きしめられながら叫ぶ。静まりかえった病院に、少年の声が反響する。少年は顔を歪め、その大きく無垢な瞳からは、とどめなく涙があふれていた。

「やだ…！やだ…っ離してっお母さん！」

少年は必死に、己を離すまいと力を加える母の腕をたたく。しかし、所詮は子供の力。大人の母は、苦しそう顔を歪めながらも、少年を離さなかった。

「お願いよ…、夏季…春季は大丈夫だから。大丈夫なのよ…お母さんを一人にしないで…っ」

母の言葉に、少年、夏季は顔をあげた。涙でくしゃくしゃになった顔で、辺りを見回す。

「お父さん…、今日も僕たちと一緒にいけないの？ なんて？

春季が…春季が…、なのに、なんで？」

子供の純粋な言葉に、母は言葉に詰まる。顔をそらし、瞳から新たな涙が頬を伝い落ちた。

母の様子に、夏季は父がもう自分たちの前に現れないのだと悟った。

母が自分を強く抱きしめる。

「お願いよ…、夏季…。お母さんから離れないで。どこかにいかないで あなた…」

母は、父を呼び、夏季をよりいっそう強く抱きしめた。

「私から…春季まで奪わないで…っ！」

その日から、春季は二度と目覚めることはなかった。

季節は冬。音もなく降りつもる純白の雪が、辺りを埋め尽くす季節。

煌と晶は、今日も一緒に登校していた。はあ、と息を吐くと、白くなる。それがいつそう、寒さを強調していた。

「あーあ、雪とか降らなければいいのに」

恨むように、はらはらと降る雪を睨んで、煌は呟いた。晶はため息を吐く。

「爺くさいこといわない」

ぺしん、と軽く頭をたたく晶に、煌はいう。

「だってさー、靴がもーびしょびしょ」

自分の靴をさして、煌は示す。確かに靴は雪で濡れていた。

「スノトレ履いてこなかったあんたが悪い。自業自得」

すぱんと容赦なく言う晶に、煌はう、と言葉を詰まらせた。

「おはようございます！煌先輩、晶先輩」

待ち合わせ場所には、寒さに負けず元気な由里の姿があった。煌が軽く手を挙げ、晶が由里のもとへ早足でいく。

「おはよう、由里。まった？」

「いいえ、大丈夫です。さっき来たところですから」

「いつもごめんなー」

煌と晶は苦笑する。由里はにこりと微笑んで、首をふった。

「大丈夫ですよー。丈夫とダンスが取り柄なんですから」

『あと早食いね』

「余計なこと言わない」

一個抜かしていると言わんばかりに話にはいった美咲の頭を、由里ははたく。といっても、手はすりぬけるのだが。

『残念でしたー、痛くも痒くもありませーん！』

「この……っ！」

ベーと舌を出してあかんべえをする美咲の顔を、由里は苦々しい顔をして低く呟いた。

いつもの、平和な光景に、煌と晶は笑った。

『春季……！春季……！』

すっかり冷たくなった体を、自分より小さく華奢な体を、夏季は揺さぶる。いつも屈託なく笑う弟はもうそこにはいなかった。顔には白い布がかぶせられ、見えない。

布と布の間に見える肌は、白いを通り越して、青白かった。夏季はそれを見て、顔を歪めた。

隣で母が泣き崩れ、嗚咽の合間に弟の名を呼んでいる。

『いやだよ……春季……いやだ……』

首を左右にふって、夏季は春季の細い手を握った。

さつきまで、
春季が、階段から落ちる前まで、暖か
かったはずだ。つい先日、この手をにぎって、公園までいった。
のに。

『はる…き…？』

ふるえる声で名を呼んでも、叫ぶように名を呼んでも、それでも、
返ってくるのは静寂だけだった。

夏季には、他の人には見えないものが見えた。

それを皆は「嘘つき」といつて罵倒するが、唯一、春季と母だけ
は、それを受け入れてくれた。

夏季は気づいていた。

母と父の離婚の原因が、自分にあることを。

だから、父も、春季も、自分が母から奪ったような罪悪感に駆ら
れた。

目の前が、真っ暗になる。

『春季……』

おれのせいだ

おれのせいだ

おれが、おれが

「見たくて、見たいわけじゃない！」

こんなものを、こんな、化け物を見たくて、みたい訳じゃない。

「お兄ちゃんは、なにも悪くないよ？」

いつか、夏季がいった言葉。友人に「気持ち悪い」といわれて、ずっと胸の内にあった言葉を叫んだ。それを、春季はまじめに聞いてくれた。

「お兄ちゃんは、ふつうだよ」

だから、だいじょうぶ。

そういつて、笑う弟の存在に、どれだけ救われたか。

だから、どうか

かみさまが本当に いるなら

春季を

おれのかわりに 春季に 命を

煌は一つ、ため息を吐いた。力なく、壁に寄りかかり、瞳を閉じる。

ちらりとの壁に掛かってある時計を見ると、もうすぐ5時を示していた。煌は時計から視線をはずすと、幼なじみを見た。なぜか自分は今、幼なじみとスーパーで買い物をしているのだ。

ちなみに今日は金曜日。

明日は晶の両親共に忙しく、昼ご飯を晶が作らなければいけないらしい。煌の母、晃が昼ご飯を馳走するといふ誘いも晶は断り、今日はその材料をかつている。

ではなぜ、煌がいるのかというと。

一言で言えば、『荷物持ち』だ。

晶は、母、梨花についての買い物も頼まれたらしい。そして、晶はそれに煌を巻き込んだのだ。

どうせ暇でしょ？つきあってよ

そう言って問答無用で襟首つかまれてスーパーまで来たのが、学校が終わり、部屋でゆっくりすごそうとしたところだったのだから、余計たちが悪い。

思わずその時を思い出し、煌は顔をしかめた。視線の先には、梨花からの買い物リストと睨めっこをしている晶の姿がある。

そして、すでに煌の腕には買い物かごがぶら下がっている。その中には頼まれた食料が入っていた。

ふう、と息をはき、買い物かごをつかみ直す。

なんで俺が……

今更な言葉が、煌の頭によぎった。

その後数十分、煌は晶の買い物へつきあわされた。会計が終わり、晶は煌に荷物をさも当然のように渡すと、歩き出す。

「あいっ……！」

煌は苦々しい顔をして、晶の後を追う。外に出ると、冷たい風が全身をおそった。

その時、晶はぼう、としていたのか、角からくる人影に気づかない。相手も、晶に気づいていない。煌は慌てて声を上げた。

「晶…前…」

向け、と言いたかったが、言うのが遅かったようだ。
「え？」

次の瞬間、晶と青年の肩がぶつかった。体制を崩す晶をささえ、煌は相手を見た。

「すみません！」

「あ、いや。こっちも悪かった……。大丈夫ですか？」

ぶつかった相手は、煌と晶より少し年上のようにだった。短く切りそろえた黒の髪に、少しつり目がちの瞳。格好はシャツとジーパンといったラフなもので、高校生くらいだろうか。

青年は微笑んで、その場を後にした。煌は晶を睨む。

「まったく。お前は…、少しは気をつけろ」

「煌にだけは、言われたくない」

少しシヨックそうな顔して、晶はため息をはいた。

青年、夏季は、スーパーを通り過ぎ、その後、深い林に入った。
その奥に、墓場が見える。

墓場を慣れた様子で進み、ある一つの墓の前で膝をつく。定期的に
来ているからか、墓は綺麗に掃除されてある。

墓に、弟、春季の好きだったジュースを置き、両手を合わせる。
何分かそうした後、夏季は顔を上げた。墓に掘られてある名をそっ
となぞる。すると、夏季の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちた。それを
ぬぐおうともせずに、夏季は掘られた文字をなぞり続ける。

「春季……」

あいたい

それはできない、わかっている

でも

どうしても

嗚呼、神様。もしも、もしも、こんな俺の願いでも、聞いてくれ
るのならば

春季に、命を

煌は片手で持っている荷物を、晶に手渡した。

「ほれ」

「ん。ありがとう」

ちなみに二人は今、晶の玄関にいる。わざわざここまで持ってきてやったのだ。もっと感謝されても構わないのだが、と煌は晶をじと、と睨むように見る。それに気づいていながら、晶は微笑む。

「それじゃあ、もう帰ってもいいよ」

「俺はお前の召使いか！」

煌は、晶の家と隣にある自分の家の扉に手をかけた。見慣れた庭を横目で見ると、山茶花さざんかの花が咲いている。

それを見て、口に微笑を浮かべると、家に入った。

三

煌と晶と由里は、学校への道を、他愛もない話をしつつ、進んでいた。

美咲は、由里の隣でにこにこ笑いながら、三人の話に耳を傾けていた。そして、ふと、親友の顔を盗み見る。

煌と晶を見ていながら、昨日のことを話す由里の頬は、心なしか赤い。そして、話をしているとき、ちらりと煌の顔を見ている。

親友の想いに、美咲は気づいていた。

子供のような仕草をする由里に、美咲は小さく微笑んだ。

「ふあー、ようやく終わったあ！」

煌はそう言っ、鞆を担ぐ。今日は特別教科書が多く、ずしりと重みが肩をおそった。中学2年になり、慣れたと思っていても、やはり重いものは重い。

「よし、帰るか」

隣で鞆を担いでいる晶に声をかけ、二人は学校を出た。

校門から出ると、正面にある高校の校門からも、男子生徒が出る場所だった。目が合う。

「あ……」

その男子生徒は、昨日晶とぶつかったあの青年だった。

「あ……この前は、本当、すみません」

最初に口を開いたのは、青年だった。少し晶と煌から視線をはずし、しるどもどろそう言う。それに、晶は慌てて返した。

「そんな……、こっちの不注意です！」

「確かにな」

「黙れ」

ぼそりと呟いた煌の鳩尾みぞおちに、容赦なく晶の拳が捻り込まれる。うとうとなつて、煌は前屈みになった。

「くっ……はは……」

青年が、我慢できないといった体で笑い出す。口に手をあてて、顔を背けているが、肩が震えていた。

その時。

『お、煌坊に晶のお嬢ちゃんじゃあ、ないかあ』

少々頭の毛が薄い、老人が煌と晶の前に現れた。煌と晶の顔は、目に見えて引きつる。聞こえているから、無視できないし、前には一般人の青年がいる。

どうしよう……

無視することはできるが、あまりしたくないのが本音だ。すると、青年の瞳が見開かれていた。

「あ……あんたら……」

のろのろ、と青年は煌と晶を指さす。

「見えるのか……？」

「え……？」

三人はしばし、お互いの顔を見つめ合うことになる。

「俺の名前は、白崎しらいさき 夏季だ。よろしく」

夏季はにか、と笑って、煌と晶にそう自己紹介した。対する煌と晶も、笑う。三人は、今、公園のベンチに座って話していた。

「俺は、井上 煌。よろしく」

「私は、佐々木 晶です。宜しく願いします」

それぞれ名乗って、向き合った。

「で…あなた、もしかしくとも」

「あなた、じゃなくていいぞ。夏季と呼んでくれ。俺も、あんたらと同じ、見える人間だ」

「やっぱり…」

驚きを隠せない様子で、晶と煌は夏季を眺めた。

夏季は乾いた笑みを顔に浮かべた。しかし、次の瞬間には、その顔を引き締める。

「…煌、と晶、だったよな？ あんたらは、幽霊が見えるんだよな？」

再度確認する夏季に、煌と晶は肯く。

「ああ。この能力を生かして、まあ、幽霊の相談に乗ったり、悪霊退治したり、幽霊探したり……」

うーん、と頭に手をあて、煌は思い出すように言う。『幽霊探し』という単語に、夏季の肩が震えたのを、晶は見た。

……？

訝しげに首を傾げて、晶は夏季を見る。

「じゃあ……頼みたいことが、あるんだ……」
意を決したように、夏季はそう言った。
煌と晶は、瞳を見張った。

「弟探し？」

煌と晶は同時に、素っ頓狂な声をあげた。
それに、夏季は肯く。

「ああ。弟が、死んだのは10年前の、ちょうど……父と母が離婚した時だった」

心なしか、夏季の声が低かった。煌と晶は、顔を引き締めて、夏季の話聞く。

「転落死だった……。その日、俺は春季を連れて、階段を早く降りれたほうが勝ち、ていう……下らない遊びをしてたんだ……」

夏季はつらそうに、一言一言かみしめて、語る。

「母を急いで呼んで……病院に行っても、助からなかった……」
その時をことを、後悔するように、言葉をはき続ける。

「俺は、物心つく時からずっと、幽霊が見えた。周りから避けられた。そのせいで両親が離婚した……唯一、唯一、春季だけは……俺を避けずに、いてくれたのに……っ！」

夏季の頬から、一筋の涙が伝う。

「だから……なんとしても、春季を見つけたい。見つけて」

その先を、夏季は言わなかった。

「わかりました。協力します」

もはや声もでないのか、黙り込んだ夏季に、晶はそう返事した。

「俺も、協力します。……できるかぎりのことしか、できねえけど」

二人の言葉に、夏季は顔をあげた。

「あ……ありがとう……」

その時初めて、夏季は本当の、安心しきった笑顔を見せた。

四

「明日、春季が落ちた、階段に行ってみよう」

夏季は落ち着いた様子でそう言つと、ベンチから立ち上がった。

「本当に、ありがとう」

一言言つて、夏季は微笑むと、踵を返す。煌と晶はそれを見送り、立ち上がった。

「俺たちも帰るか」

晶はその言葉に肯き、二人は家に帰つた。

次の日、煌と晶は校門の前で、夏季を待っていた。しばらくすると、夏季が出てくる。

「すまん。待つたか？」

「いえ、大丈夫です」

夏季が心配げにそう言つと、晶が首を振り、笑つた。それを聞き、夏季は安堵の息を漏らす。

「それじゃあ、行くか」

階段は、夏季の通っていた小学校の通学路にあつた。今改めてみると、それほど長さではないが、小さい時は、この階段が随分長く感じていた。

煌と晶はその階段を覗むように見ていた。が、煌は首を降る。

「ここにはいない」

「そう、か……」

沈痛な面持ちで、夏季はうつむく。慰めようと、晶は口を開いた。

「よく遊んでいたところとかに、霊は寄りつくことがありますから！そこに行ってみましょうよ、夏季さん！」

ね、と煌の方を見る晶に、煌は肯いた。

「ああ。いつてみるか。夏季、覚えてる？」

晶が敬語なのに対し、煌は砕けた口調で夏季に話しかける。

「ああ……確か、ここから少し遠いけど……」

夏季は上を見て、思い出すようにうなり声をあげた。

「確か、こつち」

「いや、指さされても」

「また、随分と緑生い茂ったところだな」

そこは、煌と晶がたまにいく神社と隣にある林だった。木々が生い茂り、雪が降っているこの時期、ここを歩くのは辛い。

神社とは正反対のほうを歩きながら、夏季は、懐かしい道に、思わず笑みを浮かべた。

昔はよく、ここで春季と遊んだな……

「いる」

煌は険しい顔をして、夏季と晶にいった。夏季は首を傾げるだけだが、晶にはわかるらしい。同じく険しい顔をして、煌と同じ方向を見ている。

「いるのか？春季が…」

「春季かどうかはわからない。けど」

煌は、茂みを睨んだ。

「悪霊が、ここにいる」

「あ、くりよう…？」

夏季の、掠れた声が響いた。

「ああ。しかも、だいぶ力が強い」

「美咲より強いわね」

晶は警戒を解かず、煌に言う。

「ああ。美咲より、もっと強い」

俺たちでなんとかできるかどうか、と煌は舌打ちした。夏季は、地面にへたりこみ、首を左右に振る。

「春、季……」

「まだ、春季と決まった訳じゃない！夏季、座ってたら危険だぞ！逃げる！」

夏季のつぶやきに、煌は怒鳴る。しかし、夏季は立ち上がったものの、逃げようとしなない。

「なにしてるの！？早く逃げて！」

先ほどの煌の言葉に対し、わからないようだった夏季は間違いなく、煌と晶より霊力が弱い。いくら霊を見えるだけの霊力を有していても、感じられないのなら、ここには危ないだろう。

晶は敬語を忘れて叫んだ。しかし、夏季は動こうとしない。その顔には、決意が見えた。

「夏季っ！」

煌が叫ぶと同時に、茂みから、どす黒い霊力が放たれる。煌と晶は用意してあった札で結界をはる。

「くっそ、逃げろっ…夏季」

煌は腕が痛むのを感じた。霊力で腕に切り傷が複数ついている。白の制服に、朱が滲んだ。

「春季…そこに、いるのか？」

煌の言葉を見無視して、夏季は危ない足取りで茂みに向かう。

「夏季さんっっ」

晶が叫ぶ。しかし、夏季は足を止めない。

「春季……」

茂みの向こうには、記憶にあるのと変わらない、弟の姿があった。

「春季……っ」

夏季の顔が喜びで染まる。春季は、優しく微笑んだ。

『お兄ちゃん　会いたかった』

昔のように抱きつかれると思っていた夏季に、霊力の波動が正面から当たった。

「夏季っ！！」

煌と晶の叫びが重なる。

夏季は勢いよく、木に身体を打ち付けた。

『お兄ちゃんのせいで、僕は死んじゃったんだよ？』

春季の瞳から、赤黒い涙がこぼれた。

『会いたかったよ、お兄ちゃん』

憎い憎い憎い憎い憎い

『殺してあげる』

舌足らずな声で、春季はそう言い、微笑んだ。

五

気がついた頃から、兄は嫌われていた。

周りの人から冷たい目で見られ、陰口を言われていた。でも、自分にとってそんなことは、どうでもよかった。

『春季…、ごめんな』

兄のほうが、ひどい怪我をしているのに、それでも兄は自分のために泣いていた。傷を痛い、と叫ぶわけでもなく、たかが擦り傷を負った自分のためだけに、兄は泣いていた。

『だいじょうぶだよ、お兄ちゃん』

嗚咽の合間に必死に謝る兄に、春季は苦しそうな顔でそう言った。

傷が痛むのではない。ただ、目の前の兄が。他人から嘘つきと罵られるが、本当はととても優しい兄が、自分のために泣いているのが、申し訳なくて。

『だいじょうぶだよ、お兄ちゃん』

だいじょうぶ

何度、その言葉を言っただろうか。

時が経つにつれ、春季のその言葉は色褪せていった。口先だけの、抜け殻のものとなった。

心の中で、兄を憎悪していた。

お兄ちゃんのせいで、お母さんが泣く

お兄ちゃんのせいで、お父さんが帰ってこない

お兄ちゃんのせいで

お兄ちゃんのせいで

オニイチャンノセイデ

ボクハシンダ

『赦さない……赦せないよ。ねえ、オニイチャン？』

血の涙を流しながら、春季はそう言い、霊力を放った。

「な、つ……きつ……」

春季の霊力で全身を圧迫され、煌と晶はその場に押し倒された。腹に圧力がかかり、息ができない。掠れた声で倒れている夏季の名を呼ぶが、返事はかえってこなかった。

晶はもつ、気絶寸前だった。苦しそくに顔を歪め、必死に起きあがろうと藻搔^{もが}いている。

「あ……き……つ」

煌は晶に手を伸ばそうとしたが、その指は空をかき、力なく倒れた。意識が遠のく中、煌は夏季の名を呼び続ける。

「夏……季……つ……お、きろ……つ」

何度呼んでも、夏季は答えない。力なく倒れたその肢体は、死んでいるようにすら見えた。

「夏季……つ」

『何度呼んでも、無駄だよ』

子供の声なのに、妙にはきはきと春季は言った。

『ねえ……何で僕が死んだと思う？』

春季から発せられる霊力が、力を増した。

『なんで、死んだと思う？』

春季の瞳から、また新たに血が流れた。止めどなく流れる血は春季の服を赤く染め、地面に落ちる。

『すべて、お兄ちゃんのせいなんだ』

いきなり、声のトーンが下がった。それに煌と晶は身震いする。

『お母さんとお父さんの離婚も、僕の怪我也、僕のおもちやが壊されたのも。なにもかも、すべてすべてすべて、すべてっっっ！』

霊力がまた、強くなる。

『なのに…なんで？ねえ？僕が死んで、お兄ちゃんはイキテルノ？』

おかしいでしょう？

死ぬべきなのは

オニイチヤンナノニ

「…た、しかに…そうだな」

声が、耳朶をうった。それは煌が何度いっても答えてくれなかった人物の声で。

煌は視線だけ、そちらに向けた。

夏季が、額から血を流しつつも、こちらに歩いてきた。その時だけ、煌と晶を襲った霊力の渦は、動きをやめる。

「俺が…生きていていいはずが、ない」

夏季は悲しげに笑い、首を左右に振った。春季は大きな瞳を見開いて、夏季を見る。

『いつも…そうだ…』

春季の掠れた声が響いた。

『いつも…そう…いつも、お兄ちゃんはそのやって、自分を追いつめる』

顔を伏せて、春季は首を左右に振った。

『そんな風に…言われたら、…僕は…僕は……ボクは…』

恨めない

憎めない

だって

『おにいちゃん、が…悪くないことを、しってた…！』

春季の瞳に、光が灯った。血は流れを止め、その変わり瞳からは透明な液体がこぼれ落ちる。

「は、る…き…」

夏季は呆然と、弟を見つめた。春季は顔をくしゃくしゃにして、夏季に歩み寄ろうとする。

しかし

『ぐ…あああああつっ！』

白目を見開き、春季の身体がのけぞった。

夏季は思わず身を引く。

「春季！？」

「まて！駄目だ…巻き込まれる！」

春季に近寄ろうとする夏季をとめ、煌と晶は春季をみた。春季の身体から、どす黒い霊力が渦巻く。

「飲み込まれたんだ…」

苦しそうな声で、晶は呟いた。

「のみ…こまれた？」

「そう。春季の魂に、あれほどの霊力は持たなかった。悪霊となり、憎むことでどんどん霊力は高まる……。でも、さっきでその憎しみは消えた。強まった霊力は行き場所をなくして、暴走するしかない。このままじゃ……」

煌はそこで説明をやめ、うつむく。その反応に、夏季は詰め寄った。

「このままじゃ、どうなるんだ!？」

「魂ごと、消滅する」

その言葉に、夏季の顔から表情は消えた。蒼くなつた唇で、呟く。
「しょう…めつ…」

その後、夏季は春季に駆け寄つた。

「夏季!？巻き込まれるぞ!やめろ!」

「嫌だっ!」

煌の訴えに、夏季はそう叫んで返した。

「夏季っ…!」

晶が思わず手を伸ばす。しかし、霊力によつてそれは阻まれた。
「俺のせいで、春季は死んだんだ…!一人で…逝かせるなんて、
できない!」

夏季は身を裂くような霊力をものともせず、渦の中心に立っている
春季の腕を引き寄せた。

「春季」

安心したように、夏季は微笑した。

「一人じゃない…、春季……」

春季の見開かれた瞳から、涙がこぼれる。

『お、にいちゃ……』

そして、そのまま

二人は、消滅した。

「な、つき…?」

晶は渦のあった場所で、膝をついた。

「な、つき?は…るき?」

名を呼んでも、答えは返らない。

「…や…だ…いや、だ…へんじ、しなさい、よ…!」

晶は首を左右にふって、うつむく。その傍らには、煌が涙を流していた。悔しそくに顔を歪め、立っている。

「夏季…っ」

我慢できなくなったように、晶は叫んだ。

「夏季

っっ!」

六

「な…つき…」

晶は嗚咽の合間に、何回も夏季の名を呼んだ。

隣で煌はうつむき、静かに涙を流している。

なんで止めなかったんだ！

脳裏に、数々の罵倒の言葉が浮かんだ。悔いても、夏季が戻らないことは知っている。が、そうすることしかできない。

隣に、細い肩を震わせて泣いている幼なじみが見える。いつも強い光を宿す瞳には、いまや悲しみで光りを失っていた。

泣いてほしくない

心の奥底でそう想っていても、それを口にする事なんて、煌にはできなかった。夏季の姿が脳裏に浮かび、泡のように消える。その繰り返した。

その時、草を踏む音がした。振り返ると、音はどんどんこちらに近づいてくる。

そして、音の正体が見えた。

正体を見て、煌が目を見開く。

「煌！？晶ちゃん！？」

そこには、煌の母、^{ひかる}晃と、晶の母、梨花が呆然とこちらを見ていたのだ。

「間に合わなかったか…」

晃は唇をかみしめ、苦々しく呟く。梨花も目を細めていた。

煌は事情を話し終えるとただ俯いて、一言は発しなかった。晶は梨花に背中をさすられながら、嗚咽を繰り返している。その姿はひどく痛々しかった。

「で？」

晃は煌と晶も見比べ、煌と向き直った。

「あんたは、これからどうするの？」

「……夏季の、親に……」

「言うなんて馬鹿なことしないでよ」

煌の言葉を遮って、晃の言葉が続けられる。

「あんたねえ……親になんて説明するつもり？『弟さんの幽霊と共に消滅しました』、なんて言えるわけじゃないでしょ」

晃の言葉が煌の心に深く突き刺さった。瞳を見開いて、煌は情けない顔で晃を見つめる。晃は眉間にしわえお寄せ、深くため息を吐いた。

「……確かにあんたは、好きで幽霊が見える訳じゃないわ」

晃は淡々と言う。

「この力のせいで、いろいろあったでしょう？私を心底憎んだこともあるはずよ」

その言葉に、煌は俯く。まだよくこの力を理解していなかった頃、周りの子供、大人から『嘘つき』と言われていた頃を。

「それでも……」

晃は煌を睨むように見た。

「幽霊と深く関わることを選んだのは、あんた自身でしょう」

晃の冷淡な声が耳に響く。

「幽霊と関わることを選んだ時点で、こういうことに巻き込まれることなんて、日常茶飯事よ。すべて、ハッピーエンドで終わるなんて、甘い考えいつまでも持ってんじゃないわよ」

「んなこと…」

「『考えてない』？『わかってた』？」

煌の言葉は遮られる。言葉をつまらず煌に、晃は嘲笑を浮かべる。
「本当に？」

違う……

煌は、両手でのろのろと顔を覆う。

違う、違う、違う

わかってた、わかってて、この道を選んだんだ

でも…

「…っ……」

思わず、走り出した。足の速い煌の姿は、すぐに見えなくなる。

「情けない」

晃は寂しげにそう言つと、梨花のほうを振り返る。梨花の隣には、
いまだ泣いている晶がいる。

梨花も、晃が煌に言ったことと同じようなことを言ったのか、真
剣な表情をしてる。

晶は顔を覆っていた手を下ろす。その顔は、涙で濡れていたが、
もう新しい涙が伝うことはなかった。

そして、そのまま無言で立ち上がり、走り去る。晶も足が速いの
で、すぐ姿は見えなくなる。

晃と梨花はしばし沈黙した。

その沈黙をはじめに破ったのは、晃だった。

「甘い気持ちで、幽霊と関わるんじゃないわよ」

幽霊は、死者の『想い』を具現化したようなものだ。

気持ちが強すぎて、死んでもなお、楽になれなかった者たち。

「そうね」

梨花はそう呟くと、細い手で拳をつくった。

荒々しい足音が響く。俯いたまま、煌は自室に駆け込む。音が大きいたてで、扉を閉める。そして、その場でうずくまり、煌はあふれる涙をとめもせず、声を殺して泣いた。

弟を…

悲しそくに、後悔の色に染まった瞳で、愛おしげに、懐かしむような声で、弟のことを話す夏季。

『一人じゃない、春季』

安心したように、微笑んだ夏季。春季は、本当は夏季を殺したくなかったはずだ。

なのに

俺は、助けられなかった…！

『ハッピーエンドで終わるなんて、甘い考えいつまでも持ってるじゃないわよ』

晃の言葉が耳に反響して、消えていく。

嗚呼

俺は

「最低だ…」

甘い考えで、軽い思考で、霊と接していた。なんとかなるだろう、
そう軽い想いでこの道に踏み込んだ。

「ごめん…ごめん」

夏季

春季

ごめん

お前らを助けられなかったのは

俺のせいだ

「ごめん……」

煌の声は、弱々しく部屋に反響した。

七

「…どうしたんですか」

由里は、顔を引きつらせて、煌と晶を見比べた。理由は、二つある。一つめは、煌と晶が異様に離れていること。もう一つは、二人の顔がこの世がいまにも終わりそうなくらい、暗いからだ。

「…え…別に？大丈夫よ、由里」

晶は今ようやく由里がいることに気づいたのか、顔をあげ、無理に笑ってみせる。しかし、すぐ俯いた。

煌は沈黙している。

「じゃあ早く行きましょう」

晶が慌てたように言い、三人が歩き出す。

由里の隣に、美咲が現れ、心配げに親友の顔を仰ぎ見る。由里はそれに気づき、苦笑して美咲の頭を優しく撫でた。

気まずい…

煌は、隣で俯いて歩く晶を一瞥した。

高い位置で二つに結ばれた漆黒の髪が垂れて、顔が見えないが、きつと辛そうな顔をしていると安易に想像できる。

『ありがとう…』

安堵の笑みを浮かべた、夏季の姿が脳裏に浮かんた。自分たちを頼って、そして信用していた夏季。でも、結局なにもできなかった。逆に、夏季を見殺しにしてしまった。

うつむき、歯を食いしばる。そうでもしなければ、叫び声を上げてしまいそうになるからだ。泣き叫んで、すべてを忘れたかった。

心が壊れそうだ。

握りしめた拳が小さく震える。

隣にいる彼女も、自分と同じ思いをしているのだろうか。

晶には…こんな思い、させたくなかった

できるなら、笑ってほしかった。霊と関わると決めたのは、彼女も同じだ。でも、できることなら。

結局、俺は、なんにもやり遂げていない

自分が酷く滑稽に見えた。

自嘲な笑みを浮かべて、煌は瞳を強く閉じる。

晶は俯いたまま、視線だけ煌にやる。煌は俯いて、目を閉じているようだった。

髪の間から、眉間にしわがよっているのが見える。歯を食いしばり、彼は俯いていた。

なんにも、できなかった…

自分はいつも、視ているばかりだ。

夏季の時も、そうだった。自分はただ泣くばかりで、彼になにも言えなかった。泣くことに逃げて、周りを見ようともしていなかった。甘い考えで、霊と関わっていた。安易な思考で、夏季の相談を受けた。

『なんとかなるでしょ』

そういう甘い考えが、今回の結果をよんだ。

煌だって、自分と同じように辛い。やるせない、悲しいはずだ。なのに、自分はただ泣いて、彼に余計悲しみを与えた。

最低だな…私は…

晶は、苦しそうに顔を歪めて、唇を強くかみしめた。口に、鉄の味が広がる。

服を握りしめ、晶は肩を震わせた。

学校につき、由里は二人と別々になった。肩に妙に力が入っていたため、二人と別れた後、ふうと息をはいて、身体をリラックスさせる。

美咲がまだ心配げにこちらを視ているので、安心させるように微笑む。

美咲はほ、と表情を和らげ、ブレスレットに戻る。

由里は、教室に向かった。

由里と分かれたため、煌と晶の間に会話はなく、無言で二人一緒に教室に向かうこととなる。

いつも痴話喧嘩を繰り返している二人の間に会話がないので、周囲は不審そうな、残念そうな顔をしている。しかしそれはだんだんと困惑に変わる。

なにせ、二人とも俯いているのだ。そして、妙な沈黙が広がっている。廊下の左右すみにそれぞれ平行に歩いている姿は、いっそ不気味である。

「…どうしたんだ？二人とも」

誰もが近づけなかった二人の間に、煌の親友である一樹いつきが、怪訝な顔をして入ってくる。

煌は、顔をあげ、親友の顔に肩の力を抜く。

「一樹…」

「どーしたんだ？煌。今にも窓から飛び出しそうな顔してるぜ？」

わざとからかうような口調で、一樹は言う。確かに、煌の顔は青白く、生気が感じられない。それは晶も同じで、いつも意志の強い色を宿した瞳は、光を無くしている。

「んなわけねーだろ」

煌は無理に苦笑して、また俯く。一樹は一瞬無表情になったが、すぐにいつもの調子に戻り、煌と晶に話しかけるも、二人とも俯くばかりで、話を聞いていない。

「あら？どーしたの、一樹、晶、煌君」

「^{みさ}美沙」

一樹は、現れた彼女に少し安心したような顔をし、目配せする。美沙も人目視て、親友とその幼なじみの異変に気づき、小首を傾げる。

「どうしたのよ？晶」

美沙は晶の肩を軽く叩くが、晶はちらりと美沙を視て、苦笑するだけで、なにも言わない。

「……？」

一樹と美沙は互いに顔を見合い、首を傾げた。

「朝礼は始める前に、お前たちに言わなければいけないことがある」
教室につき、みなわいわい騒いでいる時、やけに深刻な顔をした担任が入ってくる。皆いつせいに話すのをやめ、担任を見つめる。

「昨日、近くの南沢高校の一年生が行方不明になった」

その言葉に、クラス全体がざわつき始める。その中で、煌と晶だけ、俯いていた。

まさか……

煌の頬から冷や汗が流れる。異常に手が震えた。

「名前は 白崎 夏季、という生徒だ」

担任はそう言い、プリントを全員に配る。そのプリントに印刷された顔は、間違いなくあの青年のもので。

晶は目を見開き、口が震えるのを感じる。プリントを破り捨てて、耳を塞ぎたかった。

「もし、彼を見たことがあるんだったら、後で職員室にこい」

煌は唇をかみしめ、下を向いた。そうするしかできなかった。

本当のことを言っても、『嘘つき』にしか思えないだろう。妄想か、気がおかしいと思われる。

「じゃあ朝礼はじめるぞ」

担任の声に、朝礼をする生徒が立ち上がり、いつも通りの、決まった言葉を言う。

煌と晶は、俯いたままだった。

晶は、図書室に来ていた。いつも利用者の少ない図書室は静まりかえっていて、彼女の心を幾分か冷静にさせた。

美沙…、心配してるだろうな…、由里も…

晶は適当な椅子にすわり、机にうづくまる。朝の由里と美沙の姿を思い出し、もうちょっと元気に振る舞えば良かった、と後悔した。

煌…

脳裏に浮かぶ幼なじみの姿に、胸を締め付けられる。

きつと今も、彼は夏季のことを後悔しているのだろう。自分もそうだ。

今回のことで、自分がどれほど霊を甘くみているかわかった。甘くみて、関わっていたとわかった。

夏季のためにも…

自分はこれからも、霊と関わり続けよう。いままでより、より深く。そしてより多くの霊を救えるように。

それで償いになるなんて、思っていない。でも、しないよりはましだし、これが自分が出した最善の応えなのだから。

「そうだよね…」

それで、良いよね？

晶は泣きそうになりながらも、顔を上げる。掠れた声で紡いだ呟きは幸いにも、周りに聞こえてないらしい。

煌…

朝から全然話していない、いや、話せなかった。なんだが、言葉が見つからなかった。自分はずっと泣きっぱなしで、他のことを考えていなかったのだ。

どうしよう…

晶は顔を蒼くする。

このまま、ずっと話せないかも……

大げさかもしれない。でも、このまま気まずいままだったら？

い、嫌だ…！

晶は口で片手をおさえ、立ち上がるうとする。が、それは後ろから聞こえた声で阻まれる。

「晶先輩？」

そこにいたのは、由里だった。

八

「で、どうしたんだよ？お前ら」

昼休み。煌は机に突っ伏していた。その隣

晶の席に、

一樹が座っている。晶は昼休みになったとたん、無言で教室から逃げように去っていつてしまったのだ。

一樹は呆れたように煌に問うた。煌は視線だけ一樹にやり、呟く。

「おまえにゃあ、関係ねーよ」

「あるっつーの」

ずばり、と即答して、一樹はわざとらしくため息を吐く。

「お前ら二人がそんなんだと、気まずいんだよ。さっさと仲直りしろ！」

「別に、喧嘩してないし」

煌はまた机につつぶし、顔を隠す。

一樹は目を細めた。

「なら、なんでお前ら一言も会話してねーの？」

「……………」

煌は、くんでいた腕に力をいれた。

喧嘩ではない。ただ、気まずい。無力な自分がやるせなくて、彼女に向ける顔がないのだ。

ひかる

晃の言葉が耳にこびりついて離れない。甘い考えのままで霊と関わっていた自分が、憎かった。

夏季が死んだのは、俺のせいだ……

かつて親友をその手で殺した男、優汰の姿が脳裏に浮かんた。彼はそれを償おうと、生きていくと決めたのだ。

俺の償いは……

死ぬのじゃあ、償いにならない。それは逃げだ

だから

これから、霊と共に生きよう

いままでとは違う見方で

違う決意で

それだけじゃ、償いにならないかもしれない

それでも

関わり続けよう

共に、生きよう

それが、俺にとっての、最上の償いなのだから

「喧嘩じゃ、ない…、ただ気まずいだけだ」

煌は顔を勢いよくあげ、一樹を見た。

「どうしたらいいんだ…？」

情けない顔をして、煌は一樹に言う。一樹はさあ、と肩をすくめる。

「とりあえず、話しかければ？」

「それができねーんだよっ！」

顔を紅くして、煌は怒鳴る。一樹がまた肩をすくめた。

「ようやく、いつものお前に戻ったな」

そう呟いて、一樹は煌の額に拳をこつんと当てる。

「自分で考えろ！好きな子との仲直りのしかたはな！」

「なっ…！？」

煌は今度こそ顔を真っ赤にして、一樹を殴った。

「晶先輩、煌先輩と喧嘩でもしたんですか？」

「喧嘩じゃないわよ。ちよっと、気まずいだけよ」

由里が晶の隣にすわり、小首を傾げる。晶はうなつて、こたえた。
由里はまた小首を傾げる。

「気まずい？」

「…ここじゃあ、話にくいわ、屋上で良い？」

「あ、はい！」

元氣よく返事を返し、由里と晶は図書室を後にした。

屋上は案の定寒く、吐く息が白かった。二人ともコートなんてもつてきてないので、屋上に来た瞬間、身をすくめる。

「じゃあ、話すわよ」

齒がかみ合わない中、晶は夏季のことを由里に話した。

一部始終を話し終えた晶は、そこでいったん俯いた。由里はそんな晶をただじつと見つめている。

「…それで、気まずいんですね」

「…うん」

晶はまた俯く。漆黒の髪が風で遊ばれる。

「ねえ、晶先輩」

「え…なに？」

「私、煌先輩のことが好きです」

「えっ!？」

晶が驚いたような、慌てたような様子で顔をあげる。由里は小さく笑った。

「でも、はなつから片思い承知の恋ですよ。両思いなんて夢のまた夢ってわかってます」

「……」

晶は何を言っているのかわからないといった顔で、由里を見つめた。

由里は、淡く微笑む。

晶先輩は気づいていない

自分の気持ちには気づいているだろうけど、煌先輩が晶先輩にむけている想いを知らない

だから

気づかせてあげるために、背を押してあげよう

たとえそれが私自身の心を傷つけても

だって、ねえ？

大好きな人の幸せを掴む応援をして、なにが悪いの？

「晶先輩、煌先輩に話しかけてみてください。仲直りしてください」
「でも」

「晶先輩じゃなきゃ、駄目なんです」

あの人を元気づけられるのは

あなたしかいないのだから

「頑張ってください」

由里はそう言って、微笑んだ。幸せそうに、愛おしそうに、微笑んだ。

今日は五限授業だった。終礼をして、皆それぞれの部活動へいく。そんな中、煌と晶は二人無言で廊下にいた。教室は、いま男子が体操服に着替えている。

二人とも、無言で俯いている。教室の男子や、廊下にまだいる女子も、ちらちらと二人を気にしているようだった。しかし、二人ともそんなことに気づかない。

どうしよう…

晶はちらりと煌を見る。

なに話したらいいんだ…？

煌はちらりと晶を見る。

二人とも、なんて言えばいいのか、わからず沈黙が広がった。

結局、二人とも話しかけず、別々に家に帰ることになった。その行動も成り行きで、晶が早足で帰ってしまい、煌は一人でゆっくり歩いて家に帰った。

部屋に戻っても、やっぱりすつきりせず、一階へ降りる。

すると、母、晃が、晶の母、梨花と玄関で話している最中だった。

「あ、煌」

晃が立ち上がり、口を開く。

「晶ちゃん知らない？」

「は？どういうことだよ」

「それがねえ」

次の晃の言葉に、煌は我知らず家を飛び出していた。

『晶ちゃん、学校から家に帰ってきてないのよ』

九

由里は、階段を早足で駆け上った。

うつむき、家族への会話もしないまま、自分の部屋へ駆け込む。

「……はあ……はあ……」

学校から家まで全速力で走ってきたため、息が荒い。呼吸を整え、ベットに倒れ込んだ。

枕に顔を埋め、部屋に沈黙が広がる。すると、由里の隣に美咲が現れた。美咲は悲しそうな顔をして、由里の後頭部に小さな手をおいた。そしてそのまま優しく撫でる。

由里はそれに気づいているが、なにも言わない。しかし、しばらくすると、由里の肩が震えてきた。

「うえ」

由里は、枕カバーをきつくつかみ、嗚咽を繰り返す。涙が枕カバーにしみこんだ。由里はただただ泣いていた。美咲は、そんな由里の頭を黙ったまま泣いていた。

由里はゆっくりと起きあがる。まだその瞳からは涙がこぼれ落ち、シーツに落ちる。

美咲は由里の頭を撫でてた手をとめ、いまだ嗚咽を繰り返して泣いている親友を強く抱きしめ、あやすように背を数回叩いた。

初めて恋をした。でも、それは叶わないと分かり切った想いでわかっていた。わかっていたから。

愛した人が愛したのは、私が尊敬している人で。

愛した人とは違う意味で、大好きな人だったから。

二人が幸せになるならそれでいい。でも
それでも
一緒にいたいと心が叫んでいる。

由里は、美咲にすがりつくようにその背に手をのばした。自分より小さいその手が温かく感じた。背が広く感じた。
一番になりたいなんておもわない。
笑ってくれば、それだけで私は嬉しいから。
だから、だから、どうか

幸せに　　。

晶は、神社にいた。霊のいない神聖な地は、酷く静かなように思えた。

階段に座り、くんだ腕に顔を埋める。冷たい風が首をかすめた。
寒いけど、家に帰りたとは思わない。

ため息をはいて、晶は泣きそうになるのをぐっと堪えた。

煌、いまなにしてるかなあ…

もう家に帰っているだろう。晶は顔をあげ、雪の降っている灰色の空を見上げた。顔に雪が当たる。座っている階段にもうつすらと雪が積もっていて、冷たい。

煌…

逢いたい、話したい、謝りたい。

私だけ逃げてごめんね

夏季のことを、泣くことで逃げていた。大声で泣くことで、現実から逃げていた。

「煌…」

「……見つ、けた……！」

返るはずのない声が、返ってきた。

晶は驚きに目を見張って、前を見る。そこには息をきらしている幼なじみの姿があった。

「…なんで…」

掠れた呟きが口からこぼれた。煌はすこし眉を寄せると、大股でこちらにくる。晶はあわてて立ち上がり、無意識に逃げようとするが手を捕まれた。

「晶」

たった1日呼ばれなかっただけで、ひどく懐かしいと思っている自分に驚く。

「ごめんな」

「なんで、煌が謝るのよ」

真剣な顔をして謝る煌に、晶は俯いたまま言う。煌は晶の手をつかむ力を強める。

「俺が、逃げてたから」

なにに、とは言わなくてもわかっている。

「逃げてたのは、私のほうだよ…なんで、私が言おうとしていたこ

とを先に言うの！」

晶は半場逆ギレ状態で叫ぶ。煌は目を丸くした。

「煌はいつも、そうやって自分の立場悪くして…馬鹿じゃないの？
悪いのはあんだけどじゃないのよ！逆にあんたは悪くないの！私が
悪いのよ！」

晶はそう叫んで、顔をあげた。

「ごめん」

晶はそう言うのと、また俯く。

煌は小首をかしげて、ぐい、と晶の手をひっぱった。

「うえ？」

晶はそのまま前方に倒れる。

「うわあっ！？」

そのまま、思わず目を強く閉じる。が、衝撃がこない。背にぬく
もりを感じて、晶は顔をあげた。
そして、状況に絶句する。

煌が、晶を抱きしめているのだ。突然の出来事に晶の顔は真っ赤
になる。

「ちょ…！？え…！？」

晶は両手をじたばたさせるが、まったく煌の腕の力は緩くならな
い。

「煌…？」

晶の肩に顔を埋めて、煌はくぐもった声でこたえる。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃないよ。離せ」

自分の背を強く抱きしめる腕を叩き、晶は抗議の声を上げる。

「いやだー」

「……なんでよ」

「なんでだろ？」

煌はわからん、とこたえた。それに晶は思わず握り拳をつくる。
「わからん、であんたは幼なじみの女子を抱きしめるのか…！」

晶はその拳を煌の腹にめり込ませる。しかし、それは寸での所で止まる。

「好きだから」

時が、止まった。

目を丸くして、晶は顔をあげる。視線の先には、ゆでだこのように紅くなっている煌の顔があつて。

「好きだから……」

真っ赤になつて、そつぽをむく。

「だいたい、お前もお前で。ただの幼なじみに抱きしめられてんなよ。いつものお前ならこんなこと、理由聞く前に速攻で」

「好きだからよ」

晶は煌と同じように真っ赤になつて、大きい声で煌の言葉を遮る。
煌は晶の言葉の意味を探っているようだ。しかし、しだいにその顔は怪訝なものに変わる。

「あのさ…、お前、意味わかつてる？」

「わかつてるわよ！」

「俺の言ってる意味とお前の言ってる意味。違つかもだけど」

「恋愛感情で好きだつってんでしょ!？」

「……………」

煌は、目を丸くしてまじまじと晶を見つめていたが、次第にその顔は嬉しそうな笑みに変わる。そして、晶をまた強く抱きしめた。
「…っ!？」

いままで我慢していたものが、そこで一気に流れ出す。晶の瞳からとどめなく涙がこぼれ落ちた。

煌の背に腕をのばして、抱きしめ返す。

大好きだよ、大好き

ずっと、側にいよう

この命が尽きるまで

「はあ…寒い…」

両肩をだくように腕をくみ、晶は震えた。隣で煌は苦笑し、手を伸ばす。

「うわ…お前の手、冷たっ！」

「これで暖かかったらおかしいだろうが！」

晶は呆れたようにそう返し、煌の手を握る。

「おーあったかい」

「冷たい冷たい冷たい冷たいっ！雪女かお前は！」

「それが彼女に言う台詞か！」

晶はそうかえし、幸せそうに微笑む。煌も、同じように微笑んだ。

「じゃあ、バイバイ。また明日」

晶と煌はそれぞれの家の真ん中でわかれ、それぞれ自分の家に帰る。

煌の家に前には、雪が積もる中、山茶花さだんかが美しく咲き誇っていた。

煌く想いを、今、

あなたに捧げよう

。

花が咲き誇るかのように、美しいあなたに。

どうか届きますようにと、この想いを。

第四部 煌く想いと 咲いて散る花と 完

あとがき

『煌く想いと 咲いて散る花と』、完結しました！

嬉しくもあるし、寂しいとも感じます……。初めての長編小説完結に驚きです。

活動報告のほうで、『2月中旬には完結』とかいてあったのですが、予定よりはやくなりました……。

では次から作品解説です。

煌く、はじめ、第一部の儚き想いを 花に捧げるだけでした。考えていた話は。

でもそれじゃあ、短すぎるな、と考え直しまして。第四部構成にしたのです。

そしてその四部構成もはじめは三部構成で、第三部で完結しようかなーとおもっていましたが、主人公2人の恋愛かいてないな、とそこで初めて気づきまして……。

そうしてできたのが第四部です。テーマは第一部が悲恋、第二部が友情、第三部が罪、第四部が恋愛、です。

そして気づいた人は気づいたであろうネタ公開。

この物語はあらずじで書いてある通り、煌と晶の一年間の物語です。そしてあとも一つ、キーワードに花とあるように、花も必ず一部でてきています。

第一部 春 櫻

第二部 夏（梅雨） 紫陽花

第三部 秋 彼岸花

第四部 冬 山茶花

第三部のほうは罪がテーマだったので、花を薔薇にしようかなーと考えていましたが、薔薇って秋に咲かんだろ、と思い直し、秋代表（勝手に私が思いこんでいるだけですが）彼岸花に。

山茶花は、冬に咲く花をしらべて、気に入ったので。なぜか国語の教科書に山茶花の写真がのってて驚きました。

とりあえず、話の中で書きたいものはかききって、すごく満足します。

最後になりますが、ここまで読んでくださった方、ありがとうございます！

また、別のお話でお会いしたら、その時も宜しくお願いします！

霜月 雪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5772o/>

煌く想いと 咲いて散る花と

2011年9月29日14時31分発行